

風土記

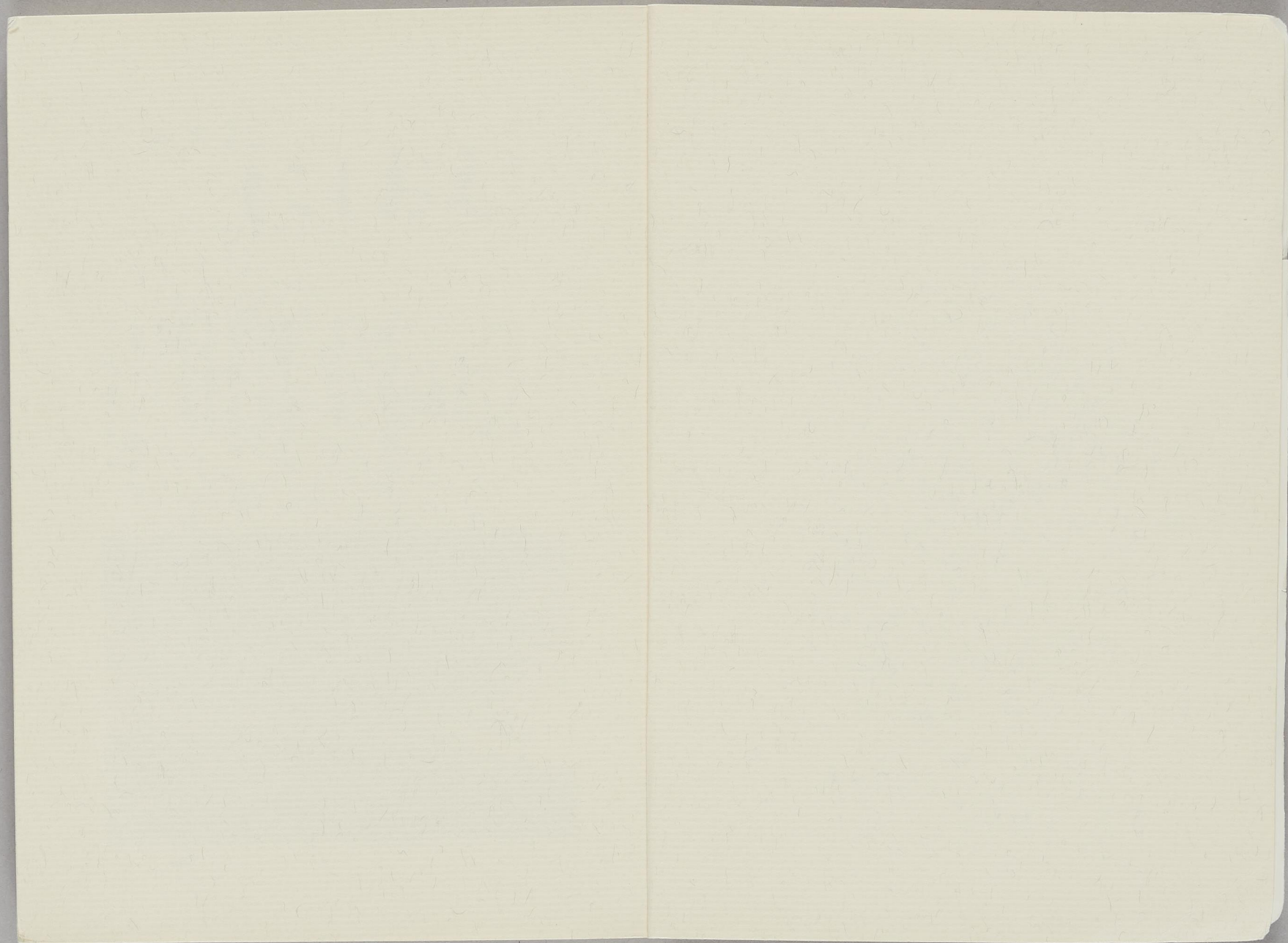
にしおえ



鴨島町西麻植公民館







風土記

にしおえ

ふるさと

東西にのびる道
南北にはしる道
ひろがる家並
ひらけた田畑
そして学校も
みな遠き親たちより
うけついで
ふるさとの宝

世は移り人代るとも
ふるさとの
よきものを大切に
あすへあしたへ
夢ふくらませ
生きようよ
ふるさと「にしおえ」を
ほんとに愛しながら



風土記
ふるさと



遙かに東禅寺山を望む



「風土記にしおえ」発刊によせる

鴨島町長 河野 正

文化の発展とともに次第に忘れられていくのがふるさとである。ふるさとは遠きにおいて思うものといわれるが近くにいと、とかく昔のふるさとが忘れられていることは事実である。私はふるさとを心から愛している。

このたび西麻植地区の「風土記にしおえ」が発刊されることは、こういった点から非常に喜ばしいことでもあります。

自分の子供のころをふり返ってみると、色々の思い出が、走馬燈のように浮かんでくる。西麻植地区民の憩いの場だった「壇ノ原」「江川遊園地」は、かつての面影が見られないほど変わっている。夏になれば懐しい輪抜けの「中内さん」螢の飛び交っていた「江川」等幼いころの思い出が次々と思い出されてきます。この風土記が、ふるさとの発展につながるならば幸いです。皆さんも「ふるさと」をいつまでも忘れないようにしてほしい。

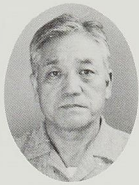
それが地区の発展を示す歴史であるのです。「ふるさと」をお互いに大切にしたいものです。



発刊にあたって

教育長 大知 泰一

人は生まれた風土で育ちその文化遺産の伝承を受けて人間性豊かに育っていくものであります。然しながら高度な経済成長のかけで家庭も社会も経済優先の生活の波に精神文化がおしながされ、美しい自然に親しむことや郷土の人々の心のさきえともなっていた伝統のある郷土行事等もかけをうすめて、物で栄えて心で減んでいくという伝統的な文化遺産による人情が失なわれつつある時、西麻植公民館では植村芳雄館長を中心として西麻植の文化財、伝統文化等の研究を計画され、同志と共に「ふるさと」探求をはじめひたむきな情熱をかたむけて資料を収集されこれを集大成してここに「風土記にしておえ」として刊行されました。その内容は「ふるさと西麻植」の確認であり、失なわれつつあったふるさと文化伝承の偉業であります。この貴重な資料によって多くの方々が「ふるさと」をもつことの幸せをかみしめ、温かい人情をとりもどして、より豊かな「ふるさと」への連帯感を深め、住みよい郷土づくりにたのしい日々を過ごされるよう願っております。終りに編集にあたられた方々のご労に深く敬意をささげ感謝申し上げます。



ごあいさつ

編集委員長 植村 芳雄

私が郷土史に興味をもちその研究団体である阿波郷土会やその徳島支部会・徳島史学会の一員に加えていただいて故飯田義資先生や金沢治先生の教えを受けるようになって二十数年になりますが、その間持ちつづけていた夢は郷土の歴史等を一冊にまとめてみたいということでありました。

私が昭和五十四年四月西麻植公民館長に推されてから西麻植地区の公民館運動の一環として、みんな「ふるさと西麻植の読本をつくろう」という声があがり、昨年同志相寄り委員会を作り、そのチームワークによってこのたび念願の「風土記にしておえ」が完成したのであります。

内容については委員一同完全なものとは思っていないし、当然入れるべきものもあるので将来できれば第二集を出したいと思っています。

どうか地区の方々はこの本によって郷土の歴史を知っていただいて各々の事物に愛着をもっていたきたいし、他郷へ出ている方々はこの本を座右の友として郷土をしのび心の糧かたとしてもらいたいと思います。

もくじ

「風土記にしろえ」発刊によせる
発刊にあたって

ごあいさつ

第一章 西麻植の歴史

第一節 治	3
第二節 家系と人物	28
第三節 戦史	42
第四節 経済	53
第五節 河川	65
第六節 教育	87
第七節 生活と文化	98

第二章 神社・仏閣

第一節 神社	113
第二節 仏閣	130

第三章 遺跡・古墳・記念物

第一節 遺跡・古墳	143
第二節 記念物	156

第四章 地名

第一節 地名考	177
---------	-----

第五章 民話・伝説

第一節 民話	185
第二節 伝説	191

第一章 西麻植の歴史

第六章 民俗・スポーツ

第一節 信 仰 199

第二節 年中行事 231

第三節 物 語 242

第四節 スポーツ 260

近郷の歴史探訪をかねての
ハイキングコース 271

西麻植歴史年表 284

あとがき

第一節 政 治

粟国（あわのくに）

古代前期に成立したクニの一つで、国造本紀によれば応神天皇の御代に高皇産靈神九世の孫千波足尼が国造に任命されたものである。これは長国造と同様地方豪族の一首長であったと考えられる。その範囲は鮎喰川上流の名西郡神山町上角にある一宮大粟神社を中心とし、麻植郡、美馬郡の吉野川南岸から北部の阿波郡、板野郡にまで及んだ。構成基盤となる氏族は長族と同様、出雲系の先住民と奴国の移住民と伝えられるが、共同祖神は長国のそれと異なり、国造本紀には高皇産靈神、また古事記によれば大宣都比売命とあって共に穀物生産に係している。阿波の国名については古代より美馬郡、麻植郡、阿波郡等の山間畑地で粟などの雑穀類を多く産したためという説もあるが、これには他の地域の適地条件と比較して本県だけが粟の特産地とはいえない事から異説も多い。しかし大化改新後、南部の長国の領域も含めて阿波国と決められた。

棟 附 帳

棟附帳とは今の戸籍簿のようなもので、熊本藩と徳島藩のみに名付けられた戸口などの調査結果を、町村毎に集録した帳簿で人別帳に当る。鴨島町誌に記載されているので、左に写してみよう。

麻植郡西麻植村棟附帳写

家数合 九拾九軒

人数合 貳百七拾八人

高合 六百四拾壹石壹斗八升貳合

右の帳簿の明暦三年（一六五七年）は藩主蜂須賀侯が入国したのが天正十三年（一五八五年）であるから、入国後七十三年後の調査結果ということになる。それは今から三百二十五年前であるが、現在の西麻植地区の戸数が昭和五十六年末で九百戸足らずであるから増加率から見ると少ない。都会へ出て行ったり、藩政時代は半ば公然と墮胎が行われて人口調節されていたためであろうか。

五 社 宮 事 件

この事件は現在名西郡石井町高原の主謀者の下に麻植、名西、名東、板野の藍作農民が藩の苛酷な税金に対して立ち上がった百姓一揆であるが、事件のあらましは次の通りである。当時の我々の祖先達が如何に酷税に苦しめられたかがこの事件を通して読みとれる。（以下廻文等は現代語訳）

廻 文 の 事

一、葉藍の取引について税金が四分掛になって二十四、五年になるが、三年前より玉師株制度ができて藍師や作人共は困っているうえに、値段も下がりまた凶作が続き年貢上納にも差しかかえ、両親や妻子、牛馬等も養いがたいので、来る二十八日に鮎喰川原に集合することに決定している。その時にはほら貝、鐘、太鼓の音を聞きつけた場合は残らずみの笠に身を固め、こん棒等を持って連判状用意のうえ参集すること。この廻状を村々の寺々へ廻すので、速かに次の村の寺まで届けてもらいたい。若し届けない寺があれば焼打ちにするぞ。

子閏十一月

麻植、名西、名東、板野郡総作人共へ

以上の通達は、宝暦六年（一七五六年）に阿北四郡に廻した廻状の文句である。

此の廻状は、享保十七年（一七三二年）は未曾有の蝗害で農民の生活が困窮したが、藩も財政が行きづまったので、藍と塩の統制取締を行って重税をかけた。農村は凶作と重税に苦しみその上水害等も重なり、農民は木の根、草の根をあさる有様となった。

そのため藩に対して不穩の形勢が拡がり遂に宝暦六年百姓達はたびたび会合して対策をねり、高原村百姓常次郎、同養子の京右衛門等五人が代表となり、たびたび藩に対して百姓の困窮している実状を訴えてその救済を請願したが、その都度中間藩吏の手によって藩主に上達されなかつた。結局この一揆の背景には藩財政の窮乏、監制改革、小農切り捨て、特権的玉師への保護集中、農村窮乏と以上のような状況を考えることができる。

藍作農民達はもちろん村役人や村々の玉師達も一致して改革に抵抗しようとしたのであって、その波は東は名東郡の芝原村（現徳島市国府町芝原）北は板野郡の吹田村（現板野町吹田）神宅村（現上板野神宅）西は我が西麻植村までも波及するしまつてあつた。

結局、最後の手段として前記廻状を廻して、農民が城下の鮎喰川原に集合し、強訴による解決をはかるという生きるか死ぬかの決断をしたわけで、こんな事をするのも一家が飢え死にするせと際立っていたわけである。

この廻状もこの西麻植の十力寺を無事に過ぎたのであるが、三ツ島村（現川島町三ツ島）の蓮光寺の密告によって代表者として高原村の五人組常右衛門、山口吉右工門、長兵衛、山口市左衛門・京右衛門等五人の代表者が捕えられ、翌五年の宝暦七年（一七五七）三月十八日鮎喰川原で磔の刑により処刑されたのである。鮎喰川の刑場では何百人となく処刑されたと思うが、記録によると西名東川原、下鮎喰川原、僧都川原、上鮎喰川原等、流れが変る毎に刑場が変つたようであるが、この五人の処刑については単に鮎喰川原において処刑されたと記録にあるだけで上記のどこで処刑されたかはさだかでない。

右の五人の処刑の外にその家族や他の主謀者は国外追放、郡外追放、入牢等の刑に処せられたもの二十四人の多きを数えたのである。

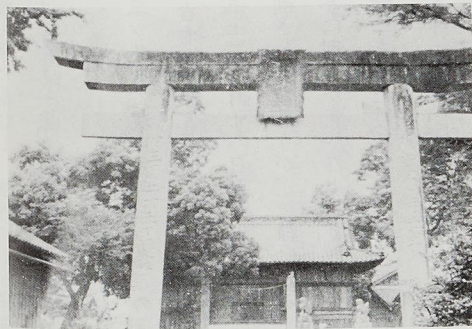
五人の処刑は大雨の夜行われたといわれ、その夜は五人を慕う人々が涙を流して号泣しながら、だんだふんだり手を合せ念仏をとなえたり、藩の暴政をのしる等の中で行われたといわれるが、

悲惨極まりない別れであったであろう。しかし、この犠牲によって藩の専売制度を大きく後退させ、藍作農民の要求は一応達成されたのである。

我が西麻植村の農民も藍作によって生きていたので無論この事件に参画していたのであるが、処刑者の中には一人も入っていない。

その後、天明元年三月二十五日二十五年忌を記念して小社を建立、五人の霊を祀ったのが今の石井町高原の五社大明神である。藩では罪人を祀るのは不都合であると嘉永五年（一八五二）社殿を毀し祭祀を厳禁したが、住民は明治十二年に復活して五社神社と改め、社殿を新築して現在に至っている。その後明治三十九年三月一日、五十年大祭をあげ、大正十四年村社となっている。

なお、この近くの宝光寺に祀られている本尊愛染明王は、五社大明神が藩命で破棄されてからこの仏を通じて五人の冥福を祈ったといわれている。



五社神社

庄屋さん

藩政時代の村は、庄屋さんが村長さんであったが、現在残っている記録を見ると、明和六年に庄屋として多田喜右衛門の名が出ている。また肝煎として文化四年に儀七郎、また庄屋として享保五年に六之助、庄屋後見として同年伝左衛門の名前が見えている。

※庄屋 平安時代の莊園の莊官、莊家に由来するといわれる。江戸時代には一村の長として村内の治安、勸農、水利土木、年貢取立、祭礼等の村政全般をつかさどり、村外領主との折衝に当った職務に対して、一定の給米（庄屋給）が給せられた。

※肝煎 肝入とも書く。各種団体の世話役、またその職、名主、庄屋の別称でもある。

※庄屋後見 庄屋が死んで嫡子が幼くして庄屋になった場合は、仕事が充分にできないので後見役を置いたのがいわゆる庄屋後見である。

藩政時代の水害と減税

西麻植地区は、吉野川の遊水地帯といっても過言ではない位、年々洪水に見舞われ、農作物が水

びたしになったり、土砂に埋つたり

した。これは堤防がなかつた時代で

はどうすることもできない宿命であ

った。

そうした場合、貢租の減免が藩に

対して嘆願されたことは当然であつ

たが、封建社会においてはなかなか

許されないことで、申請の何分の一

かに削られたことは想像に余りある

と思われる。とにかくいくらかでも

減免されたことが西麻植の「川成引

川成引調

年 度	西 曆	件 数	減 額	
			反 別	高
元禄2年	1689	2	反. 畝. 米 7.9	石. 斗. 升. 合. 勺. 才 4.0.4.0.0
〃 4年	1691	2	4.21	3.5.2.0.0
〃 6年	1693	5	2.3.9	1.1.5.0.0
〃 7年	1694	15	8.4.18	4.9.6.9.0.0
〃 14年	1701	7	3.8.9	2.7.3.7.0.0
〃 16年	1703	6	1.3.12	1.1.9.2.0.0
〃 〃	1703	12	5.2.9	3.4.0.9.0.0
宝永1年	1704	8	3.2.12	1.1.9.8.0.0
〃 3年	1706	1	3.3	6.2.0.0
天明5年	1785	2	1.0.15	4.7.1.0.0
〃 〃	〃	4	9.0	米 1.6.5.6.8 麦 1.3.0.8.0
〃 〃	〃	15	5.8.9	米 7.2.6.1.8 麦 5.7.3.3.0
寛政7年	1795	5	2.7.6	米 5.7.6.8.0 麦 4.5.4.8.0
文化11年	1814	1	2.6	1.3.2.0.0
文政12年	1829	1	1.5.0	3.0.0.0.0

調」に残っているのので、鴨島町誌に記載されているその表を右に転記してみた。

※川成とは、中世、近世の土地制度で洪水のため、荒地となった河川流域の田畑。川成は除田、

川成引、川欠引などとして免除された。

御用金の調達

徳島藩も藩主や重臣の子供たちを家臣に加え、家録を与えねばならず、また米の経済から金銭経済への移行、生活程度の向上等の理由によって、藩の財政も次第に窮迫してきたので、藩としては文政十三年（一八三〇年）八月二十七日、二十七階級の身分制度をつくり、上納金額の差によって身分を上げるようにしたが、安政六年（一八五九年）の上納者およびその与えられた身分は西麻植村では左の通りである。

一、金百両 無役人 鴻野与右衛門

一、金八拾両 夫役御免人 工藤儀一郎

一、〃 〃 〃 〃 為三郎

明治元年九月調達令としては

- 一、金五百両 郡付浪人 工藤儀一郎
- 一、金貳百両 郡付 工藤為三郎
- 一、金百五十拾両 〃 工藤要兵衛
- 一、金五十拾両 郷付 佐野貞次郎
- 一、金五十拾両 御鉄砲 麻植松太郎
- 一、金五十拾両 小高取 麻植加茂四郎
- 一、金参拾両 寺領寺正 多田孫三郎
- 一、金参拾両 寺領寺正 植村徳太郎
- 一、金参拾両 先規奉公人 近藤 玄泉
- 一、金参拾両 無役人 真左 衛門

郡 会 議 員

明治から大正にかけて郡会議員制度があつた頃、西麻植地区から郡会議員として選出された人たちの氏名が、鴨島町誌に載っているのので、ここに記載してみよう。

- 明治三二、一〇、一〇選挙 工藤 源助
- 明治三六、一〇、一〇 〃 工藤 源助
- 明治四〇、一〇、一〇 〃 工藤 源助
- 明治四四、一〇、一〇 〃 植村磯三郎
- 大正 四、一〇、一〇 〃 植村磯三郎

西尾 村長

明治二十二年十月一日、市町村制が施行されたが、それより鴨島町合併までの村長は左の通りである。

明治二二、一一	多田与三郎	大正一二、三	石原 善助
二三、四	近藤 政治	昭和 二、七	石原 雄一
二三、六	野々村水澄	七、六	工藤 長久
二七、六	安部省三郎	九、一二	新居 英一
二八、一一	近藤 政治	一六、二	工藤 宗正
三〇、一一	西田 鉄志	二〇、二	須見 徳実
三七、七	工藤 半平	二一、四	石原 國男
三七、九	工藤茂三郎	二二、四	松岡 司郎
四〇、四	新居 一平	二四、一	曾我部光晴
大正 九、一二	工藤増五郎	二七、一二	平島 正

昭和二十九年三月三十一日付をもって現鴨島町に合併し現在に至る。

西麻植村議会議事録抜書

明治十三年抜書

- 一、議員日当の義は腰弁当にして一日分金式拾式錢宛と決す。
- 二、正副議長日当は、腰弁当にして一日分五拾錢を充て会前の用務を総て義務と決す。
- 三、各人腰弁当とするも議事の都合により支度をなす事もあるべし、且つ支度料金費を以つて弁すと決す。

明治十四年抜書

議員心得の項の抜書

- 第一條 議員の着服は必ず羽織袴又は洋服を用ゆべし。

学校建設の件

- 一、当村の学校は已に本年四月村会で借地して建築するに決したが、該地主の反対を以つて是迄日が経過した。

今回臨時の会を開きたるは中央の処で売地があり（五畝十歩）河野宝蔵たり、此の地を河野米蔵が先に購入の約束、六十六円以下にて買取り建築するに決す。

予算

一金六百元

内参百円

百四十円 民有金

百六十円 青柳の原野売払金

内参百円

賦課金 七割……村中地価金額扶課

三割……全戸に賦課

建築着手は明治十五年一月四日よりとす

明治十四年十二月二十六日

議員日当の件

一、正副議長 日当金八拾錢

議員 日当金五拾錢

明治十四年十一月一日

学校建築に付経費節減の件

一、芝居諸興業の村内営業は小学校落成迄総て停止す。

二、他県、他郡、他村より寄附金、万人講等は総て禁止す。

之を村境及辻々に表示す。

三、議員日当

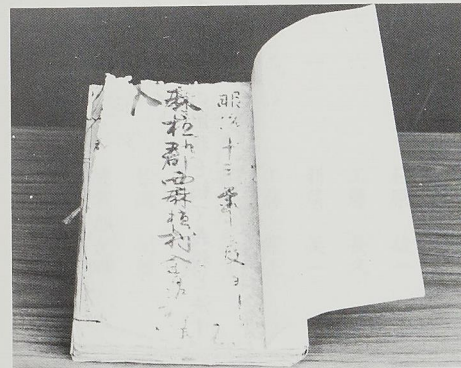
一、正副議長 三十錢

2、議員 二十二錢

明治十五年抜書

予算

一、金拾四円



村会議事録
(明治十三年)

十四年八月、十五年九月迄松本重延居宅を学校に借用した家賃一ヶ月一円分

明治十五年八月二十三日

一、金百四十四円四十九銭

青柳鎌田喜平裏破堤修理費

明治十五年九月十八日

.....

一、金拾円

八幡神社神輿修繕補助金

一、金六円五拾銭

中内神社神輿新調買入

之は八幡神社及中内神社の古神輿二体と中内神社神輿を新調交換

明治十五年九月十八日

.....

明治十六年抜書

予算

一、金貳拾円

銅像予算

二、金百貳拾円

小学校訓導松本真栄月給七円の処、勉勵実効あるを以つて月俸拾円に増加す。

三、右は本村小学校へ他区から通学する者に授業料として一ヶ月九銭徴収す。

四、金拾円

是は本村小学校草始の際、河野栄太郎家屋敷年借用の節、家屋賃貸支払残り見積りに付、本村協議費を以つて支払に決す。

二月〇日

.....

明治十七年抜書

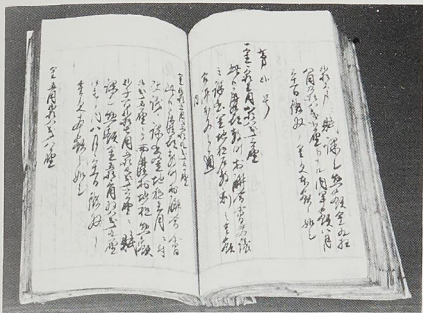
予算

一、七拾二円

訓導一人月俸拾貳円
一、金拾円

此は福見安平家敷及納屋分教場に借家、其家賃十六年三月より十二月迄十ヶ月分月一円の借賃

十七年八月二十一日



村 会 議 事 録

明治十八年抜書

十九年四月より同二十年三月迄教育費予算額

一、金貳百九拾五円九拾銭

西麻植小学校費

内貳百五拾五円九拾銭

一、金百八拾円(訓導給料)

訓導二人分

一人月給八円、一人月給七円、十二ヶ月分

一、金参拾六円(教育補助給料)

但し教育補助一人月給金参円、十二ヶ月分

一、金参円(小使給料)

但し小使一人日給金拾銭、三十日分

一、金貳円七拾銭(教育旅行費)

旅行三日一日金六十銭滞在三日一日参拾銭

一、金参円(生活賞与費)

但し一年二百二十四日以上出席し、格別勉励する生徒六十人と見積り一人賞品代金五銭

一、金拾八円(需要費)

薪、炭、油、ローソク、筆、紙、墨、其の他消耗品

一、金貳円(営繕費)

一、金壹円貳拾銭(通信費)

但し郵便一ヶ月五度と見積り一度税金貳銭、拾式ヶ月分

西麻植地区選出の議会議員

一、西麻植村村議会議員

明治十三年の議会議事録によれば議員三十名で議長は笠井與三平氏の名前が出ている。

二、西尾村村議会議員

明治二十二年十月一日飯尾村、敷地村、西麻植村が合併して新しく議員選挙が行われた。定員は十六名であった。

明治二十三年四月會議録記載（以下全部順序不同）

工藤源助・工藤半平・工藤虎吉・河野米蔵・植村磯三郎・河野武源太

明治二十五年十月會議録記載

植村磯三郎・立石偵太郎・工藤半平・工藤源助・工藤虎吉・岡田政八・河野武源太

明治二十九年一月會議録記載

工藤半平・植村磯三郎・工藤源助・工藤虎吉・河野米蔵・立石偵太郎・笠井與三平・岡田政八

明治三十二年五月會議録記載

笠井與三平・工藤虎吉・河野米蔵・植村磯三郎・幸田與之一・岡田政八

明治三十五年三月會議録記載

工藤虎吉・麻植松太郎・磯田文平・岡田政八・幸田與之一

明治三十七年十月會議録記載

工藤虎吉・河野米蔵・植村磯三郎・幸田與之一・磯田文平・岡田政八

明治四十年十月會議録記載

工藤半平・植村磯三郎・岡田政八・江沢保之助・平島儀平・工藤源助・幸田與之一

明治四十三年十月會議録記載

岡田政八・幸田與之一・植村磯三郎・工藤鷹助・工藤源助・江沢保之助・工藤半平

大正二年十月會議録記載

工藤半平・植村勘三郎・工藤鷹助・河野当五郎・江沢保之助・工藤守次郎・幸田與之一

大正六年十一月會議録記載

岡田九平・工藤鷹助・江沢保之助・工藤守次郎・平島儀平・植村勘三郎・岡田頼助

大正十一年十一月會議録記載

麻植清六・工藤鷹助・明石角太・福井市太郎・平島儀平・明石多一郎・幸田寿平・河野藤十郎
大正十四年十月会議録記載

工藤鷹助・明石多一郎・福井市太郎・明石角太・江沢馬之助・立石市平・平島邦雄
昭和四年十一月会議録記載

平島儀平・工藤守次郎・江沢馬之助・原田恒三郎・明石多一郎・工藤鷹助・植村要・幸田寿平
福井市太郎

昭和八年十月会議録記載

工藤鷹助・平島市太郎・津田寿助・幸田寿平・江沢馬之助・植村要・坂野栄次郎・福井市太郎
野口政助

昭和十二年十月会議録記載

植村要・坂野栄次郎・平島市太郎・工藤鷹助・野口政助・津田寿助・工藤守次郎

昭和十七年六月会議録記載

鎌田虎行・植村昇・梯芳男・工藤頭太郎・津田寿助・鎌田虎雄・工藤正太郎・坂野栄次郎

昭和二十二年五月会議録記載

津田寿助・工藤頭太郎・戸出健吉・加藤金作・岡田嘉納・四宮梅吉・島野豊一・植村昇・鎌田
虎雄・河野清五郎・河野盛・梯芳男

昭和二十四年二月会議録記載

戸出健吉・麻植本十郎・福井茂喜・岡弥一・工藤頭太郎・植村昇・三橋音吉・津田寿助・河野
盛・梯芳男

昭和二十八年一月会議録記載(新鴨島町議會議員として一年間勤務)

中村種男・江本哲雄・津田寿助・多田幸七・明石吉郎・多田良男・河野光太郎・梶村喜平・

工藤頭太郎・木内昇司

三、新鴨島町議會議員

昭和三十年三月二十七日(新鴨島町発足第一回選挙当選)

坂野秀雄・江本哲雄・多田幸七・工藤慎造・植村昇

昭和三十四年三月二十二日当選

工藤慎造・多田良男・木内昇司

昭和三十八年四月三十日当選

江本哲雄・木内昇司・工藤重行

昭和四十二年四月二十八日当選

植村昇・江本哲雄・木内昇司・工藤重行

昭和四十六年四月三十日当選

稲井広平・河野定一・河野貞男・工藤重行・戸出匡

昭和五十年四月二十日当選

稲井広平・河野定一・河野貞男・工藤重行・戸出匡

昭和五十四年四月三十日

稲井広平・河野定一・工藤重行・工藤敏夫・戸出匡

西尾村名の消えた日

昭和二十八年九月一日に町村合併促進法が制定せられ、その有効期間である三十一年九月末日までに人口八、〇〇〇未満の小規模町村を合併し、町村の数を三分の一に減少することによって、新しい地方自治を行うことが決定せられた。

それまでにすでに現在の範囲の合併については皆が考えていたことで、割合スムーズに話が進み、二十九年三月三十一日に新鴨島町が発足したわけである。

合併した西尾村においては、二十九年一月二十六日に協議会規約を議決して、二月三日牛島、森山、西尾各村および鴨島町が合併促進協議会規則が制定され、ここに町の協議会が設立された。

協議会の会長は鴨島町長川真田高太郎氏で、委員として西麻植地区では多田良男、平島正、河村文平、津田寿助、中西一二、加藤金作の諸氏であった。

そして町村合併計画が策定され、新町名その他について協議の末、円満に昭和二十九年三月三十一日に新しい鴨島町が発足し、西尾村の名が歴史上から永遠に消えたのである。

第二節 家系と人物

忌部族（いんべぞく）

四（五）世紀の大和朝廷の発展期にあつて、他の地方豪族とともにいまの麻植郡を中心に開拓し、繁栄、発展したと思われる一族、もともと忌部は齋部とも書き、中臣氏（のちの藤原氏）と同様大和朝廷に神宮で仕える有力な中央豪族であり、その祖は天太玉命であるという。忌部氏が正史に登場するのは六四五年（大化元年）であり、その後神事の役割のこと、壬申の乱参加のこと、天武帝より姓（かばね）をさずかったこと等の記載がある。また擡頭する中臣氏に対抗する手段として一族の広成の著した「古語拾遺」は有名であり、これらをへて八六九年（貞観十一年）高善により齋部と改めた。（三代実録）この忌部氏は他の有力氏族と同様各地に私有地（田莊）、私有民（部曲）を所有した。忌部氏の田莊や部曲は阿波国のみでなく、讃岐、紀伊さらに伝承によると（古語拾遺参照）上総、下総、安房国にもあつたと思われるが、主家とは血縁関係はなく、その職は神職でもない。阿波忌部は木綿や麻布を紀伊からは木材を送るといった具合で、本来主家に収める農民であつたと思われる。麻がよくふえた所を「麻植の郡」と名付けたといわれ、後世大嘗祭に、麻布を貢進したようである。木屋平村三ツ木の三木家は代々麻布を織つて朝廷に献納した家で、阿波忌部の正統と伝えられている。

「古語拾遺」に「仍令天富命率日鷲命之孫、求肥沃地、遣阿波国殖穀麻種其裔今在彼国當大嘗之年貢木綿、麻布及種々物、所以郡名為麻殖縁也。」とあることから、忌部氏族が我々の郷土に移住定着したことがうかがえる。



忌部古墳

河野家旧記

予州城主河野四郎通信落城の後、通信、通重、通忠、三兄弟ともに阿波国麻植郡に來り通忠は樋

山路村（現鴨島町樋山路）に落付通重は同郡喜來村

（現鴨島町喜來）通信は西麻植に住し、永祿六年（一

五六三年）歿とあり後裔河野当五郎氏本旧記を伝う。

（以上、久保忠男著麻植郡郷土誌原文のまま転記）

河野当五郎家は絶家となりその一族は西麻植に散

在す。現在本宅は他家に売却し、跡形もないが、釜

屋の一部が半壊のまま現存している。



河野家の碑
(樋山路)

工藤甲斐守

甲斐の守は山嶋城の主将なり。阿波誌曰く「藤原某稱工藤丹波守又有伊賀並居宇村又有甲斐守居

敷地村子某稱齋十郎其裔移飯尾村」とあり、他書に又曰く「甲斐守

二子あり。兄を左衛門、弟を右衛門といひ、左衛門西麻植村に住

し、弟飯尾村に移るとあり、甲斐守何地に於て戦死なせしや詳ら

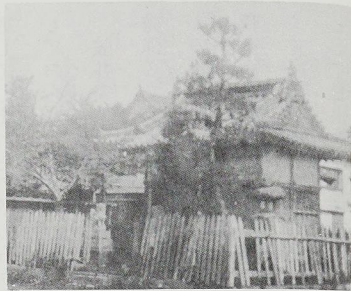
かならず。飯尾村工藤翁吾氏所蔵系譜に曰く、元祖伊豆国住人工

藤左衛門尉祐経建久四年五月二十八日富士野御狩の節、鶏早啼せ

しに時刻違ひ出立し、曾我兄弟に

打たれ、子孫漂泊の身となり、数

代年歴遙かに押移り、当国住居の



西麻植城跡 (工藤神社)

始祖工藤甲斐守祐重、同郡敷地村に在城し、管領細川氏采地を領し、

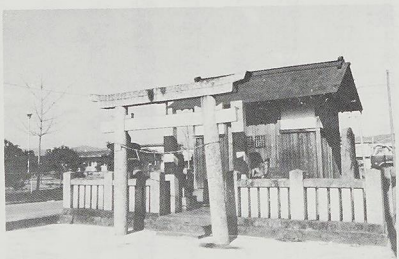
後此村に移る。其子右衛門尉重能元龜年中三好氏に與みし、河内国

高屋城攻合戦の節も鶏早鳴せしに時刻まどい出陣して戦死す、其子

幼稚にて孤となり領地を失ない、此村の民間に零落す、工藤一家に

鶏を飼育せず云々」とあり。工藤家の一族は現在西麻植に住す。

（以上久保忠男氏著、麻植郡郷土誌の原文の通り転記す）



現在の工藤神社

刀匠笠井一族

一、刀匠笠井家

現在西麻植広畑の東南端に住んでおられる笠井正七さんの家は、阿波藩の刀匠として明治初年頃まで近義、尊照(尊輝)、尊護、尊義と四代にわたり活躍した。その作品についてはあまり多くは残っていないが、度々の対外戦争に持ち出され特に太平洋戦争には家々から参戦したくらいなので散逸してしまったのであろうか。正七さんも子供の頃はまだ納屋のおぶたに道具類が残っていたと話しておられる。

笠井家は東禪寺の墓地から南の山田の湯吸谷にかけて藩主から刀を鍛える時に使用する木炭用材確保のため土地を拝領したが、明治十年頃にかけて不用になったため売却したり開墾したりした。この時忌部松といわれる所から鉄剣、曲玉、鏡等多数出土している。なお先代義一氏は二十五才で鴨島小学校長となり、後神戸市から招かれて永年校長を勤めた。次弟通夫氏は東京帝国大学医学部を首席で卒業後、ドイツに留学し帰朝後井上家の養子となり、井上姓を名乗り終生東京帝大の教授として日本医学界に貢献している。道夫氏寄附による門柱が西麻植八幡神社前に今も残っている。

なお笠井家は刀匠以前の人々の職業は不明である。

二、初代刀匠近義について

近義は笠井家の刀匠としては初代といわれている。近義は文政七年(一八二四年)八月六日に死亡となっているから、二十才後半頃から独立して活躍したとすれば、安永(一七七四年)一七八一年、天明(一七八一年)一七八九年、寛政(一七八九年)一八〇一年、享和(一八〇一年)一八〇四、文化(一八〇四年)一八一八年頃であろうか。当時の阿波藩主は十二代蜂須賀治昭公の頃である。木屋平村の三ツ木空地の八幡神社所蔵のものに笠井近義の銘のある刀が残っており、また市場町八幡の坂本氏所有のものに阿州臣笠井近義の銘のある槍が残っているそうである。

三、刀匠二代目尊照(尊輝)について

刀匠として二代目の尊照(後尊輝と改名)は、文化(一八〇四年)一八一八年、文政(一八一八年)一八三〇年の頃に大いに活躍した。刀工修業のために同じ士分の美馬郡岩倉の刀師石川正守、同正道、徳島市内の近藤透利等と共に、四名で藩主の命により、江戸の刀匠水心寺正秀に入門して修業を積み一人前の腕前となり帰国した。藩主の命で大小二振の刀を鍛え、これを献上してこの刀を藩主の面前で試し切りが行われたが、大岩を真つ二つに切ったという話が伝わっている。これは

無論大げさな作り話でよく切れたことの話である。しかしよく切れたことは間違いなからう。それで藩主から褒美をかねて東禅寺の墓地の南から湯吸谷にかけての土地を薪炭用地として拝領したのであり、大いに面目をほどこしたことであろう。

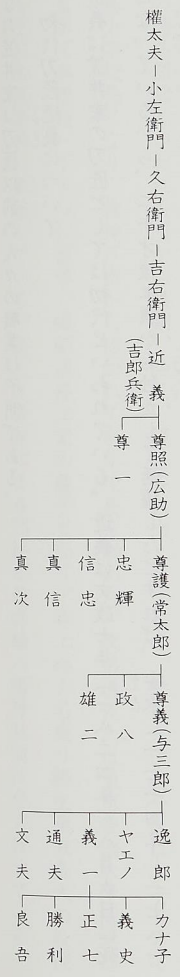
四、刃匠三代目尊護について

この尊護も父に劣らぬ技を持ち、作柄もよく似たものであるといわれている。なお弟たちの忠輝、信忠、真信等も兄尊護に劣らぬ技量を持っていたそうである。

五、刀匠四代目尊義について

尊義も刀を打ったが、この時代は刀よりも鉄砲の時代であつたので、鉄砲鍛冶として有名であり、その作品は鴨島町敷地の青木幾男さんも保存しておられる。

六、笠井家系図



七、刀匠水心寺正秀(笠井尊照の師)

笠井家の刀匠二代目で有名な尊照が、藩命により他の三名と共に入門した正秀は新々刀の祖であり、且稀代の刀工養成家といわれている。

羽前の国山形の藩士で寛延三年(一七五〇年)同国の赤湯で生まれ、姓は川部、通称儀八郎という。明治の頃は鈴木三郎宅秀(いえひで)と銘を切り、後山形へ移住して英国と銘を切ったそうである。

安永三年(一七七四年)正秀と改名して江戸へ出て日本橋浜町に居を構え技量も秀でて有名であつたので、入門者が多く多数の弟子を育てたという。文政二年(一八一九年)入道して天秀と号し、同八年九月二十七日死去したと伝えている。

郷土の人物

近藤 廉平



三菱の社長であり、明治の財界を牛耳った岩崎弥太郎の姪を妻とする位の大人物である。

江川の代々医を業とする家に生まれ、後、徳島に出て藩儒新居水竹先生に師事しているが、明治三年の庚午事変では、恩師新居水竹先生の自決死体の引き取り人となっている。

徳島藩参事、星合常恕に従って高知県に行き、岩崎弥太郎と親密になっているが、これが後に、岩崎と手を組んで事業を行うことになるのである。

横浜の三菱支店支配人になってからトントン拍子に出世し、日本郵船社長の他、十指に余る会社の代表取締役となり、大正九年には勲一等に叙せられている。故郷の西麻植には、学校等に多額の寄附をされている。

画伯 河村 李軒

明治二十九年一月二十六日、川島町大字宮島（現善入寺島）で河村清平の長男として生まれ、吉野川改修工事のため、西麻植字絵馬堂（現南麻植市自治会内）に大正二年移住してきた。

麻植郡立蚕業学校を卒業して養蚕指導員等をしていたが、画才があったので大志を抱き、京都に出て南画家池田春渚の門を叩き、内弟子となり修業した。後、春渚が物故したので、甲斐虎山に師事して李軒と号し、別府に居を構えて文展や南画展等に出品し、しばしば入選した。

溪流、瀑布をはじめ、老梅を描くのが得意であったが、昭和二十八年十二月十九日別府で没した。画伯の作品は、西麻植の旧家に数点残っている。

工藤 鷹助、正太郎、六三郎の三兄弟

麻植市郷の工藤虎吉氏の長男が鷹助氏であり、次男が後に工藤館蚕種合名会社副社長として兄の

社長を補佐し、会社を盛業にみちびいた正太郎氏であり、三男がこの六三郎氏である。



鷹助氏は長男なるがために郷土に残り、中央で活躍はできなかったが、大人物であったから、もし中央に出ていけば大をなしたと思われる。この鷹助氏は、家業の藍商から蚕種製造業に転じ、大正末期の養蚕最盛期には従業員四百名をかかえ、蚕種製造量は全国の十位内に入るほどの田舎としてはめずらしい大事業を張った。また、江川遊園地を独力で経営して、永年無料で開園したのであるが、ここに遊びにこなかった人は、県下ではおそらく一人もないであろう。



三男の六三郎氏は、東京帝国大学農学部を卒業後、大学院で研究を積み、大正四年より三年間、欧米各国に研究視察を命ぜられ、望まれて米国イリノイ大学の講師となり、アメリカ人のエリザベス・スワンズン嬢と結婚の後、栄進して教授となった。その間、微生物の重要な研究成果を発表しており名誉教授となるとともに、ルッツガール大学の名誉教授にもなっており、終生アメリカの農業発展に寄与されている。

工藤 正平



氏は工藤半平氏の二男として生まれ、当時の最難関、第一高等学校を経て、東京大学電気科を卒業、先ず通信省に入ってエリートコースを歩んだのである。英、米に政府の연구원として派遣される等により、世界のトップ技術を身につけ、東京工業大学講師等を歴任した。

後に日本発送電株式会社理事となり、主として水力発電工事に関係した仕事を続けた。日本が、戦後いち早く立ち上がったのは、水力発電に負う所が多いが、氏の力が非常に関係しているのである。また、電力関係から退いて後は、キリスト教本部の財務部長として活躍、徳島県が生んだ第二の賀川豊彦とまで呼ばれて有名である。

井上 通夫

広畑の藩政時代の刀匠笠井家に、尊義の三男として生まれ、長じて第一高等学校に入学、首席で



卒業し、東京帝大の医学部に学んだが、在学中望まれて井上家の三女と結婚し、井上姓を名のった。
大学も首席で卒業し、その後、同大学に残って教授となり、一生を同大学で過ごしたのである。もちろん、名誉教授となり、昭和三十四年東京の自宅において逝去されたが、葬儀には勅使も派遣され、葬儀の様子の一部は、NHKより全国に放送されたのである。

高志 幸好

西麻植の小学校に籍を置いた人の内に成功者は多いが、その中でも氏は代表的人物であろう。
氏は小学校高学年の時に家庭の事情で学校をやめ、大阪の商店へ店員として親元を離れて勤めに出たが、幼くして唯一人他郷に出て父母や兄弟と離れて暮すことはどんなに淋しかったことであらうか、しかしながら氏はよくこれに耐え辛抱を重ね仕事に刻苦精励、主家の為に尽力すると共に商



売を覚え終戦後独立して次第に店を大きくし、遂には丸福商事株式会社を興し現在の大きさをなしたのである。

西麻植小学校創立九十周年の記念事業としてプール建設の話が出たが、これを氏に相談に行ったところ、氏は直ちに何か郷土の為にしたいとかねてから思っていたところだといひ、工費概算六百万円の半分の三百万円をその場で寄附してくれたのである。

委員としては将に驚天動地ともいえる大感激を味ったのであり、プール建設はこれにより一挙解決したのである。

麻名用水は改修と河水の汚染によって水泳ができないのでこのプールは現在学童達の貴重な鍛錬の場となっている。また百周年記念の時もピアノ等を寄附していただいたが、この氏の行為は学童達の生きた教材と云っても過言ではない。

第三節 戦史

東禅寺の戦

西麻植の多田家系図（多田家は多田源氏で、兵庫県のも田村で居住していたのであるが、織田信長との戦に敗れて阿波へ移住して来た）と伝えられている。によれば、喜来村（現鴨島町喜来）の乗島入道の所にたよつてきていた多田家が、長曾我部元親が阿波へ進攻して来た時に、これと戦つた記録が残っている。それは「多田左衛門尉久綱弟千松打死し東禅寺焼失」とあり、多田家は久綱の祖父久重の時、兵庫県から前述のように喜来の地へたよつて来ていた時、長曾我部氏の阿波攻略作戦を受け、恐らく東禅寺を本拠とし、その山頂一帯を砦とした形ばかりの防禦陣地も、多勢に無勢その奮戦も甲斐なく、一日で陥落したのであろう。今も古老の云い伝えに、東禅寺は天正の頃、長曾我部の戦火に焼失し廢寺となつたと伝えられている。

果してその年はいつであつたであらうか。長曾我部元親が天正六年に白地城（現池田町白地）を

攻略し、同七年夏、阿北攻略作戦を開始し、重清城、岩倉城を陥落させてから翌年の七月に脇城外の戦があつた時に、郡内の諸將が過半数戦死し、その日居城も長曾我部軍に攻略されたと記録にある。恐らく、この東禅寺の戦もこの頃のことであらうか。寺跡から、戦火で焼けたと思われる唐草紋の古瓦が出土していることから、ここら一帯で戦があり、東禅寺も焼かれたことは間違いないことであらう。

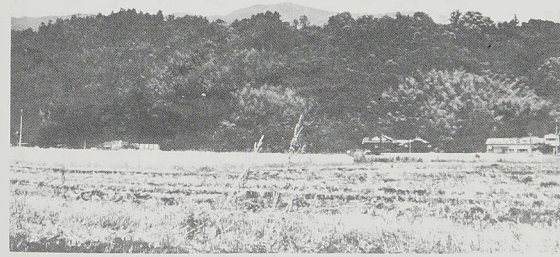
脇城外の戦

土佐の長曾我部元親は土佐を平定後、天正三年、海路を利用して阿波の海部城を攻略、同四年には三好郡の白地城を征服、六年には重清城を陥している。この時、脇城主も長曾我部軍に降つたので、美馬、三好二郡は元親の掌中に歸した。

天正七年、岩倉城主三好徳太郎は、脇城主の武田上野介や、横田、塩田、三橋氏等と謀り、当時の阿波の領主三好存保に十二月二十六日使者をおくり、偽つて

「吾等が元親に降つたのは、止むを得ずしたことである。明二十七日に土佐勢が帰国するから、人数を差し向けてくれたら、ともに戦つて元親軍を撃滅しようではありませんか。」

といつてきた。三好存保は、麻植、阿波両軍の兵を差し向け、二十七日松暁、脇城外（現在の脇町の町外れの西方の畑地辺りで、昔は竹藪が生い繁つていたといわれている）に進んだところ、伏兵がにわか起つて、主だった部将は全滅したといわれている。この辺りの部将では、鴨島墨の鴨島六之進、川島城主川島兵衛進、飯尾東墨の麻植志摩守、内原墨の内原菊太夫、飯尾墨の飯尾久左衛門等が、壮烈な戦死を上げたことが記録に残っているが、麻植志摩守の一族は、現在西麻植にも住んで居られるようである。



脇城外古戦場より脇城趾を望む

徴兵令と兵営

一、建軍当初

慶応三年（一八六七年）十二月九日、明治政府は王政復古の大号令を発し、ここに七百年の封建制度は崩壊して、兵馬の大権は再び天皇に帰したのであるが、初代兵部大輔（陸軍大臣）は、各藩主の兵権を返還させて全国統一の軍備を充実しようとしたが、この構想も武士階級の保守的な考えによる反感にあい、暗殺されたのである。

ついで大輔に任じられた山県有朋は、その遺志をつぎ、遂に明治四年二月薩摩、長州、土佐の兵一方をもって陸軍を創設した。同四年廢藩置県が行われ、東京、大阪、鎮西、東北の四鎮台と、その鎮台分営が設けられた。

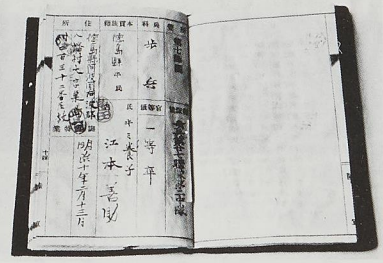
陸軍は、当時フランスの教官によりフランス式の軍事訓練を受けていたが、普仏戦争で、フランスがドイツに敗れたのを機会にドイツ式に改め、ドイツの教官を招いて訓練を重ねた。

海軍は、世界一の海軍国、英国式の教育を行った。

明治四年に四鎮台が設置されると、四国では高松城内に大阪鎮台第二分営が置かれたが、全部、士族の子弟による兵隊さんであった。

明治六年一月十日、徴兵令が公布されたが、その前日の九日、全国が六軍管区に分けられ、新たに名古屋と広島が加わり、高松の第二分営は広島鎮台管轄となり、高松分営と改称された。この管所も、明治七年十二月に丸亀に移転したのである。我々の先輩達は、検査に合格して高松や丸亀へ入隊となれば、無論テクテクと歩いて清水越えをしたり、三頭越えをして入隊したのである。

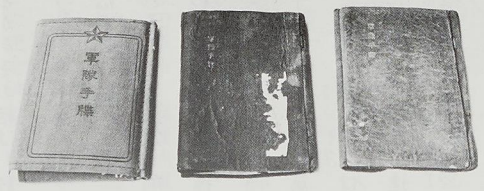
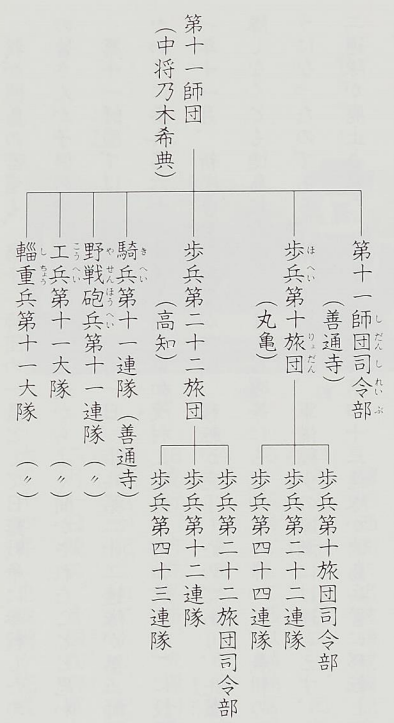
明治八年五月、丸亀の分営は歩兵第十二連隊と名を改められたが、同年九月九日、軍旗が天皇から旗手に親しく手渡された。この軍旗は、明治十年の西南戦争にはじめて参戦し、日清、日露戦争から上海事変、日支事変、太平洋戦争へと、兵の中心として生き続けたのである。我が郷土の兵達も、この軍旗の下に西南戦争、日清戦争に参戦し活躍をしたのである。



軍 隊 手 帳
(西南戦争の頃)

二、第十一師団の誕生

日清戦争に勝利を得たものの、三国干渉を受けた我が国は、弱小国の悲哀を痛感するとともに、軍備の必要性を肝に銘じ、明治二十九年七月十三日、六個師団が増設されて計十二個師団となり、四国でも初めて一個師団兵力が設置され、ここに第十一師団の誕生となったが、編成は次の通りである。



昭 和 大 正 明 治

我が徳島の若者も、第十一師団の一員として日露戦争に参戦したのであるが、その話は、お年寄の皆さんが子供の頃に、おじいさん達からよく聞かされたことと思われる。

第十一師団では、明治四十年十月一日、歩兵第二十二連隊が第五師団（広島）に編入され、そのかわりに歩兵第六十二連隊が徳島県加茂村（現徳島市加茂名町）に設置されることが決定、同四十年十一月、新庁舎及び兵営が完成、移転が完了したのであり、先輩達もわざわざ讃岐まで遠路入隊しなくとも徳島に入隊し、また日曜等にも我が家へ帰って、農耕の手伝いをすることもできるようになったのである。第一次大戦後、軍備縮少の風潮には逆らえず、大正十四年三月、歩兵第六十二連隊が廃止された。しかし、歩兵第四十三連隊が徳島兵営に移転してきたので、県の壮丁は、徳島でそのまま教育を受けられたのである。軍国主義華やかな大正から昭和にかけて、徳島の連隊は県民関心の中心で、年一回の軍旗祭を頂点として、その一挙一動は新聞により即刻県下の隅々まで報道され、県下各地の行事も、ここで教育を受けた在郷軍人達を中心になって執り行われ、社会活動は軍国主義一色であった。

忠魂碑

壇の原に、日清、日露から大平洋戦争までの西尾村の英霊を祀った忠魂碑が立っている。国のために命をささげた人々の霊を祀りながら時代の影響か、人々の関心もないままに淋しく建っている。

妻子を残して戦死された方もあり、誠に気の毒なことと思われる。

碑の西側に忠魂碑建設記念碑が建っているが、大正十四年五月十日に起工し、同年十一月十日竣工と刻んである。役員として西麻植地区関係者では、工藤儀市郎、岡弥一、平島市太郎、四宮梅吉、坂野英一、河野喜一、鎌田虎行、吉井多市、大塚利香、多田儀市、麻植徳雄の諸氏の名が記されており、紀元二千六百年十月一日起工十二月一日竣工。帝国在郷軍人会西尾村分会とあるから、大正十四年に忠魂碑が完成し、この記念碑は、昭和十五



忠魂碑

年の紀元二千六百年に建てられたのである。

なお碑の東側に、日清、日露戦争から第二次上海事変までの戦死者の氏名を刻んだ誠心碑があり、左記の方々の名前が見られる。岩久保秀雄、平島権平、市村邦二郎、平島春雄、福井虎太郎、江沢良吉、今川礼一、立石元吉、大塚義治、多田茂、多田徳太。

防空監視哨

川島や西麻植の古老の方の話によると、太平洋戦争当時、東禅寺山上に防空監視哨が置かれ、当時の西麻植の青年学校の生徒等も、監視哨員として勤務したといわれている。

昭和十三年、県が防空法に基づいて「徳島県防空計画」を作り、川島防空監視哨をふくんで、十ヶ所の監視哨が置かれた。後、昭和十七年に二ヶ所、昭和十八年に四ヶ所が増設され、また海上監視船阿波丸を室戸岬南方に派遣して、洋上の監視にあたらせたそうである。

昭和十六年十二月、勅令による「防空監視隊令」が施行されてから、県庁内に「徳島防空監視隊」が置かれて防空監視哨が強化され、各監視哨には、哨長の下に六班編成で哨員一個班五、六名、一昼夜勤務であったそうである。

この川島防空監視哨も、はじめは城山の地方事務所に置かれたが、見晴しが悪いので、昭和十七年の夏ごろから西麻植の東禅寺山の頂上に移し、一分間以内に福岡の西部軍司令部に報告されたという。

報告の要領は

(哨名) (時刻) (方向) (機数) (高度) (進行方面) (発見者)
十番川島一〇時〇分一〇方一敵機(爆音)〇発見一高度〇千一〇〇に進行中一発信者氏名
なお、哨長は川島の方が当たったが、応召等で度々交代されたという。哨員としては、川島、西麻植の青年学校の生徒や青年達が勤務されたそうで、手当はなかったという。



防空監視哨跡
(東禅寺山頂)

終戦と海外引揚者

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、太平洋戦争が日本の全面降伏により終戦となると、日本の領土であった千島、樺太をソ連が接収、朝鮮が南北に分かれてそれぞれ独立宣言、台湾は中国に接収され、そのほか外地に進出していた数多くの人々が日本に引き揚げてきた。鴨島町の記録によると、二百五十余名の人たちが着のままで、故郷の鴨島に帰ってきたのである。

西麻植へは、三十名の人たちが帰郷してきた。男女別に分けると、男二十三名、女七名で、地域別にみると、満州国十五名、南鮮五名、中国八名、台湾一名、南方一名となっている。故郷に家屋敷、田畑を持っていた人たちはよかったが、そうでない人たちは、裸で帰って来たので、一応は身寄りをたよって落ちついたものの、再起するまでは苦労の連続であった。

第四節 経 済

藍 作 の 村

西麻植村も藩政中期頃より次第に開墾され、藍作が盛んになったと思われる。「元文五年（一七四〇年）七月十日御國中藍作見分有之村々貫目之次第」に左のような一反歩における収穫が記されているが、麻植郡内の収穫高を摘記すると左の通りである。

辻（平均の意） 上（最高収量）

三〇貫	四〇貫	川島
二八貫	四〇貫	宮ノ島（現善入寺島）
三五貫	五〇貫	学村
四〇貫	五五貫	鴨島



藍 畑

一五貫	一八貫	川田
一五貫	一八貫	中村山
三三貫	四〇貫	山崎
三八貫	五〇貫	西麻植

右の表を見ると、西麻植地区は一反当り生産高は麻植郡内でも上位に位する。また、他の郡の生産高はここに掲げないが、平均して麻植郡の各町村よりずっと低かったから、県下でも反当り生産高は高かったということは生活が楽であったということであろう。

また、西麻植の藍商人達で大正初期の組合員として、次の人々の名があげられている。

刃	多田与三郎	沼	岡田 政八
イ	佐藤 岩蔵	一	多田 茂吉
穴	植村磯三郎	あ	河野 与平
卍	後藤 儀平	不	河野喜代次
直	河野直五郎	金	近藤 庄蔵
卍	岡田 幸助	松	笠井 笹市

一	堀北 由茂	全	武田茂三郎
政	野口 政助	加	中西利之吉

藍作余談

旧記に蜂須賀氏が入国して数十年の後播磨地方の者が来て吉野川沿岸の土地を見、しきりに藍作の適地であることを力説した。時の重臣達がこの話を聞いて翌年播州から二名の実業家を招き、講究伝習してもらったので藍作や製造技術が進歩し、かえって、先進地の播州をしのいだと言われる。また後に播州の殿様が阿波の殿様に藍の種を所望したので、阿波の殿様は藍の種を発芽しないように炒って渡したとも言われている。その真偽ははつきりしないが、元和年間（一六一五〜一六二四年）に播磨より種子を移し、麻植郡の呉島（現鴨島町の古名）に試植したともいわれている。西麻植辺りは吉野川の遊水地帯で年々吉野川の氾濫の時に肥沃土を置いて行くので藍作に最適地であり、最初から作られたものと思われる。

西麻植の田畑には必ずといっていいくらい井戸があった（現在は大部分埋められているが、大正の末頃までは残っていた）のを見ても、大部分が藍作地であった証拠である。われわれの先祖は、毎朝早くからその井戸の水をつるべで汲み上げる重労働を何時間と根気よく続けることの繰り返しの毎日を送っていたのである。

藍作農民は藩の重税に悩み、五社宮一揆のような事件を起こしたりしたが、百姓は生かさず殺さず、種油のように絞れば絞る程取れるといわれ、絞り取られながらもそれに耐えたのである。

又、商人、製造人等はその中であつて、明和年間の調査では国内で千二百余名あつたといわれ、税金もうまい具合に立ち回つて財をなした家も多い。各町村で素封家といわれる家は、皆藍の製造業者であつたのを見てもよくわかる。

なお、讃岐の金比羅神社の阿波街道琴平口の琴平公園にある鞆橋は、屋根のあるそり橋で橋脚が無く奇橋として木造の構築を誇っているが、麻植郡の藍の製造業者や商人の手によって寄進されたものである。猪ノ鼻峠から琴平の街へ入るバスの乗客の方は、右手の公園にこの橋があるのを見たいが寄進等の氏名が記録にはないので西麻植のだけが寄進者の名に加わっているかはわからない。

繁栄見立鏡

麻植郡の土地は藩政時代から明治中期にかけて藍作で繁栄したのであるが、東麻植郡の一角にあるわが郷土も藍作一本で生活してきたようである。

あの讃岐の金比羅さんのある琴平公園の屋根つきの立派な鞆橋というそり橋は、麻植郡の藍商達の手によって寄進されたものである。阿波街道といつて猪ノ鼻峠から行くと町へ入つて道の右側の公園の川の上に見られるから一度は見てもいいものである。

これは麻植の藍商の寄進であるが、耕作者の作った藍から利益を得て、その利益の中から寄進したのであるから、我々の祖先の人達の汗によって寄進されたといつても過言ではない。ぜひ見てもらいたいものである。

それはさておき、阿波銀行七十年史に記載されている明治十五年九月の阿波国繁栄見立鏡には西麻植分として、次の三名の記載があり、当時の資産家の姿が浮き彫りされている。

東前頭 四十枚目 工藤 虎吉

西前頭 十五枚目 工藤 儀一

西前頭 百五十枚目 工藤 半平

参考のため県下の大物等の分を記載すると、

東大関 小松島 西野 保太郎

関脇 南浜 天羽 兵二

小結 鴨島 川真田吉五郎

前頭九枚目 鴨島 川真田徳三郎

西大関 中喜来 三木 與吉郎

関脇 齊田 山西 庄五郎

小結 桑村 中 藤右工門

前頭六枚目 鴨島 川真田市太郎

前頭十三枚目 敷地 須見 徳平

明治二十九年十月の徳島県藍商繁栄見立一覧表には左の人々の名が出ている。

東前頭六十四枚目 次 西麻植 岡田 政八

西前頭十枚目 平 西麻植 工藤 源助



よく育った藍

紡績工場

十六枚目 今 西麻植 麻植松太郎

二十二枚目 今 西麻植 工藤 虎吉

総後見欄に 正 西麻植 工藤 半平

文明開化の名の通り、日本も明治維新を迎えたがその波が西麻植にもよせてきて、当時の素封家の工藤源助氏も藍商と藍の製造もしていたが、その藍寝床を利用して紡績工場を作り操業をしていたが、その年代ははっきりしていない。工藤本家は、現在のすみれ団地の元地に大きい本宅があった、その東の道路の東側にニメートル位の高さの土間に東西十九間、南北七間の瓦葺の工場が昭和四十年頃まであった。事務所がその南側にあつて、その事務所には最近まで学校の先生等が借家として住んでいた。平家ではあつたが立派な構えであつた。

その元藍寝床であつた工場は一間位の高さの石垣と土間の上に建てられたものであるが、吉野川

の堤防がなかった当時は毎年の出水にも水が乗らない高さに作られたもので、現在も残して置きたかったような見事な地盤であった。

又、工藤本家の本宅の地盤も高かったが、豪壮な門は樺造りの立派なものであった。

養蚕業の村

藩政時代から阿波藍を生産していた我が村も、盛況期は明治三十四、五年頃まで、それからは次第にドイツの化学染料におされて下降線をたどったのである。それからは次第に藍と同じような換金作物である養蚕が盛んになり、大正から昭和の初期にかけては全村桑畑で、夜道は恐ろしく一人歩きができない位であった。

しかし、この養蚕のおかげで鴨島に製糸工場が立ちならび、女工を主とした従業員をお客として次第に商店街ができ、現在の鴨島町中心部の発達の基礎を築いたのである。

昭和三年の徳島県の繭生産高番附によると、

東横綱	山瀬町	七五四六八貫	西横綱	市場町	七三五六〇貫
大関	柿島村	六六七四七貫	大関	西尾村	五八四二八貫
関脇	伊沢村	五四二一五貫	関脇	土成村	五六四九五貫
小結	林町	五二〇六四貫	小結	久勝村	五一〇七二貫

となつて県下で麻植、阿波両郡が圧倒的生産を誇っていたのである。

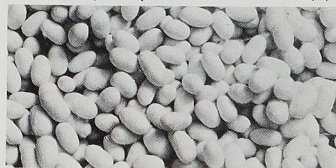
しかし、この養蚕業も輸出先のアメリカが不況で購買力が落ちたり、人絹等の発達によつて、それに押されて次第にピークは過ぎ、農民達は生活苦に暗中模索しているうちに国は戦争の泥沼に足を引っかき、国の方針にそつて今度は米の生産に転換していったのである。

工藤館蚕種合名会社

現世帯主である工藤禎造氏の家は明治初年は藍の製造を業としていたが、ドイツの化学染料におされて明治三十年頃から業界はしだいに没落の道をたどつた。当主の祖父鷹助氏はその父と共に明



蚕 繭



治三十七年より免許を受けて個人で蚕種の製造を始めた。農家も水利施設が充分でなかったので一部を除いて米作に転換できず、又、適作物の關係で大部分を桑園にして養蚕をはじめ、大正時代にかけて養蚕全盛の時代を迎えた。大正七年五月工藤鷹助弟正太郎、養子宗正の三氏によつて工藤館蚕種合名会社を設立したのであるが、養蚕業の発達と共に事業もしいに拡張し、昭和十年の最盛期には製造量百六十万グラムとなり、全国蚕種業界番付で十位以内に入るまでになった。当時の従業員は技術員男女四十名、臨時技術員十名、女工さん三百五十名を有する大会社となった。

工藤館が独自で開設した江川遊園地の運動場で秋の運動会が催されたときなど、従業員で運動場が溢れ、これが全従業員かと目を見張るばかりで、田舎としては特異なことであつた。

しかし、昭和十二年支那事変が勃発して戦線はしいに拡大し大東亜戦争に突入した頃は輸出も少なくなり、食糧不足もしいにはげしく、政府の方針として農家も桑園を倒し米作に転換を余儀なくされ、統制経済社会となつて、蚕種業界も昭和十八年日本蚕糸製造会社の設立となり吸収合併され、工藤館の蚕種製造も四十余年の歴史を閉じることになったのである。昭和十九年五月社名を合名会社工藤館と改称して事業を休止していたが、現在はバッティングセンターを経営し、若人達の健全な娯楽場として親しまれている。

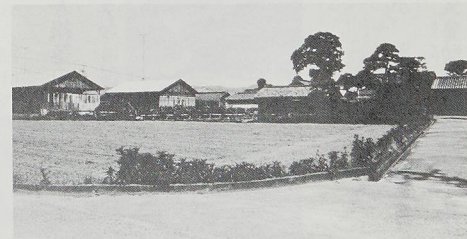
西尾耕地整理組合設立記念碑

壇ノ原の忠魂碑のある広場へ登つた右側に西尾耕地整理組合設立記念碑があるが、昭和九年五月三日設立とあつて

組合長 植村 要
副組合長 平島 嘉太郎
仁木島 元一



記念碑



工藤館全景

評議員

須見徳実、工藤鷹助、植村磯三郎

工藤守二郎、仁井宇平、西條泰次郎

多田与一、西條武明、鎌田虎雄

坂野虎一

右の役員名が刻まれている。これは田淵方面や敷地方面の一毛田でも夏期に雨がなかった時は田が干し上がってしまうので、大正十年に完成していた飯尾街道から南の地区で、十力寺から唐谷までの間の水田の水を確保するために八幡神社から北方の県道の北五十メートル位の所に水源を設け用水路を設備したものである。県の土地改良区に依頼して設計をもらい、また補助金も助成してもらって、完成した大事業で、敷地の須見徳実さんや工藤源助さんが小作地を多く持っていたので、工事費に多額の負担をかけたそう、又、工藤鷹助氏も工事費を多く補助してくれたそうであり、当時としては大事業であった。現在は取り壊されて江川に水源を設けた江川水利組合等もこれに刺激されてきたようである。

第五節 河 川

吉野川の流路の変遷



栗島渡し附近

吉野川の流路は昔は江川が本流であった時代もあった。というのは、知恵島地区が阿波郡であったことから証明できるが、堤防のなかった時代には、洪水毎に流路を変え、西麻植の平地部も水びたしとなり、川成(畑の土が流されて川原地になること)地区になつたことが記録に残っている。村見聞言上記(藩政時代に各地の庄屋から藩に村のいろいろなことを報告したもの)に「川島古城山の北山手より今の大道より北一丁ばかり北を流るる小川あり、川成地姿顕然にて低き土地連綿としている。この筋少しく東北に向いて流れし川筋は今の落窪より北を経て上下島の西南へ落入りたり。また

今の置石より東北に向いて麻植市の北筋より広土、江川等の方に至て或時は鴨島に、或時は上下島に落ちたりと見え、其流跡川岸の構等処々に存せり。中にも南にあるのは絶残りの川と見えて東西に長き池三ヶ所迄あり」とあるように吉野川の川筋は西麻植地区では何か所もあるようで、また当時は大洪水があった場合はその都度流路が変わり、その度に河跡湖ができたのであろう。

現在の麻名用水も、だいたいの旧吉野川の流跡である低地を利用して掘ったといわれているように、麻植市と新田の境までは、特に低地で、川島町山田から落ちてきていて湯吸谷川と吉野川の支流が合流していた所といわれ、そこから斜に西麻植駅、遊園地方面に流れていたようで、今も深い流跡が残っている。

南方の山麓方面の深田は数千年前は吉野川の流跡であったといわれ、麻植市郷の明治乳業の北から麻植市郷東端の地蔵さんの東側を東南流する凹地、江川遊園地方面から上下島へ抜ける凹地等も吉野川の流跡である。また今は家が残っていないが西麻植駅の南二〇〇メートル辺りには砂屋屋号の家があった。そこは裏に舟がついて砂の運搬の商売を藩政時代にはしていたといわれている。

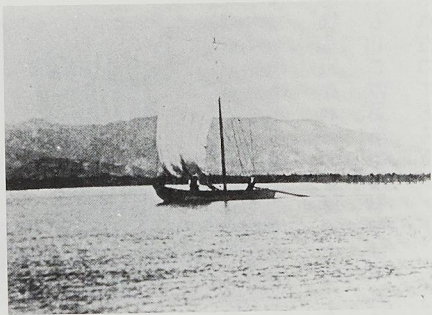
また現在の粟島地区もとは粟島(善入寺島)と地続きで阿波郡に属していたといわれているから、今の鉄道あたりが本流であった時期もあったのであろう。

吉野川を利用した河川交通

昔は道路が発達しておらず、橋梁も石橋や木橋であり、また交通機関も貧弱なもので、荷物の運搬は陸上では人の背や馬の背を利用する程度であった。

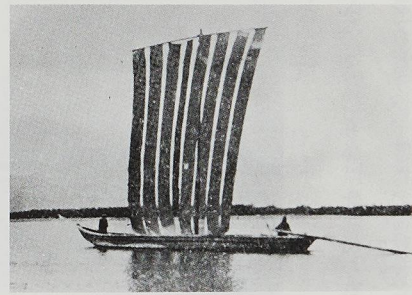
阿波の国においても、藩政時代に吉野川沿岸に適作物である藍作を奨励したが、それを全国に運搬し、またそれに必要なしん、いわし等の魚肥の運搬、藍作奨励による米麦雑穀等の穀類の移動や、その他の荷物の輸送は結局吉野川という大河を利用した、河川交通にたよるよりほかにしかたがなかったというよりは、吉野川をうまく利用したといった方がよいであろうか。

それではどんな舟によって、これらの荷物が運ばれたであろうか。いろいろな川舟が使われたが、ひらだ舟(平田舟)、平駄舟とも記されたが単に平たい舟という意であろうか、平たい荷駄舟という



なつかしい帆かけ舟

意であろうか、長さ五間中十尺位で六十石（二千四百貫）積
とか、えんかん、いくいな舟等大小のあるもののみな舟底が
浅い河川交通に適した舟であった。当時は池田から徳島まで、
毎日多くの舟が通っていたそうで、大正十年頃までは東禅寺
の上からも帆を張って通っている舟が、たまには見られたも
のである。舟は下りは流れにまかせ、船頭達は鼻唄や舟唄を
歌ったり、くわえ煙草で下ったのであるが、上りは帆を張つ
て風をたよりに上ったものである。秋冬の西北の季節風の吹
く頃は逆風なので、二、三人の舟人が川岸で前半分しかない
足半わらじを履いて、綱を肩にかけて引いて上ったのである。何故そんなわらじを履いたのである
うか。それはお互いにずるけて踵をつけたのでは力が出ないし、もしこの足半で踵をつけて引けば、
踵も傷んでずるけたことが直ぐわかるからこんなものが考え出されたのであろう。
古老達は今でも春風に乗って、悠々と上って行く帆かけ舟の姿や、顔を真赤にして汗みどろにな
って舟を引つ張り上げる人達の苦しそうな顔が目のに浮かんできるのであろう。



心に残る帆かけ舟

なお第十の堰はインクラインがあつて、それに舟を乗せて堰を上下させていたそうであるが、そ
の経営者は現石井町覚円の光明寺の現住職吉田東洋さんの叔父に当る吉川好舎という技術者であつ
たそうである。

西麻植の荷物の荷上場は何処であつたであろうか。幕末の頃は、川の流れが北へ移動していたの
で、荷上場が中央橋と吉野川遊園地の中間地点位の堤防の屈曲地点辺りであつたそうで、その地
盤は十メートルの深さに今も残っているそうである。それより前は江川が本流のようになっていた
そうで、現在の吉野川遊園地の西端辺りが荷上場であつたそうであるが、鎌田徳市郎さんのご先祖が
当時は財産家で、盛大に運送業や商品の売買をされていたそうである。

吉野川の築堤

吉野川は明治の末に堤防がほぼ完成するまでは、我々の先祖の家屋・家財・農作物に被害を与え、
時には農地の土を根こそぎ洗い流したりして、我々の先祖を苦しめていた。明治二十三年の大洪水は
善入寺島全島を水浸しにし、家屋の流失、農地の荒廢が甚だしかった。また三十五年九月の大洪水



堤防の夕景

にも莫大な被害を与えた等のものであったので、それまでは、たびたび堤防工事に着手したものの、中途半端であったが、政府も遂に本腰を上げ善入寺島全島民の移転と吉野川の築堤を決定、明治四十年から、一応大正十年までの十五年継続事業として、工事を施行することになった。

ここに有史以来初めての一大工事が起され、毎日毎日トロッコが走り始めたのである。そして全工事が完成したのは昭和二年であり、我々の父祖は水の脅威から初めて解放されたのである。

現在の古老達は毎日毎日遊びに行つて、工事監督の目をぬすんではトロッコを押ししたり、乗ったり、また人のよい現場の人に乗せてもらったりして遊んだことを、昨日のこのようだと、その想い出を語っている。

善入寺島住民の移転

国は明治四十二年春吉野川改修工事のため、善入寺島が遊水地帯となることによつて、全住民の他地区への立退きを決定した。当時の善入寺島は戸数約五〇〇戸で、阿波郡市場町、八幡町、柿島村、麻植郡川島町、学島村の五か村に分属していた。善入寺島は美馬郡の舞中島等と同じように、吉野川が洪水となるたびに大災害を受け、特にここは流路の中央部になったので、堤外の他地域に比して家屋の流失が多く、人の流されることもたびたびであり、また畑地の土も水にえぐられ流されることも多かったのである。

しかしながら、人々はここに住みつき、子々孫々水と闘いながらも、洪水のたびに運んでくる肥沃なごみ土が農耕に適するので、ここを安住の地として生活を続けていたが、堤外の多くの人々の被害を救うための犠牲となったわけである。ここ善入寺島が、遊水地帯となったことはいたしかたないことであろう。

内務省は大正二年春頃までに全戸の買収を終つたが、翌三年末までに転居を終つた者はわずか百戸余りであつたので、強制立退命令を下し、大正五年までに全住民が移転を完了した。

当時の耕作地四八〇ヘクタールに対し、買収価格は約七十五万円であったというから、一アール平均百五、六十円であり、周辺移転先の平均地価はこの倍額位もしたのである。しかも購入できた農地は平均して悪い農地であった。

家屋の補償額も比較的悪かった。例えば当時五反百姓といえ、一家五・六人では充分食べていたのが、移転先では粗末な家を建て、たとえ半分の二反半の土地を買えたとしても、一家は食べていけなかった。小農の者は移転先で苦勞を重ね、また日傭等で生活していた人達は家も建てられず、北海道や旧韓国等へ移住した人も多く、離れて親族等をたよって散って行った。

川島城山上にある「移転の碑」は真福寺の北側にひっそりと建っているが、それには悲嘆極まりない文章が刻まれている。

「嗚呼孰か遂に墳墓の地を去つて相離れと謂わん也。此の地の士民痛嘆ここに於て窮迫せり。將に辞訣、其の事並びに転地を石に書



移 転 の 碑

いて後世に残さんとす。時に大正十年八月十五日建之」とある。そして移住者と、移転先と氏名が刻まれているが、西麻植関係では浜崎孫三郎、高橋金蔵、森四郎、伊藤幸三郎、鴻野清平、鴻野久太郎、河村清平、河村伊太郎、中寛十郎、宮本清太郎、今川金太郎、後藤田八代蔵等の方達の名が刻み込まれているが、この人達は建碑に参加した人達で、このほかに数多くの人達が移転してきて、西麻植に根を下ろしているのである。

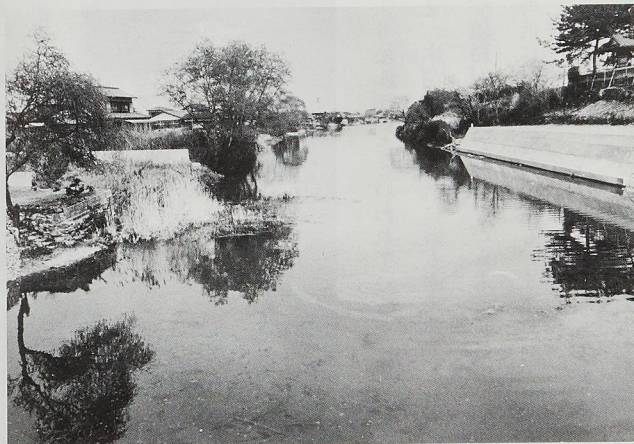
江 川 物 語

千五百年位前までは石井町の浦庄あたりまで海が入り込んでいたといわれているが、我が西麻植の平地部も恐らく当時は大部分が砂礫地で、葦が生え、水溜りが至る所にある湿地帯であったと思われる。洪水のたびに吉野川が土砂を運んできたたり、流路が変わったりしながらも、次第に土地が高くなり、特に河岸段丘を南から南から造って、藩政時代には平地部の中でも、まず田淵・中筋の方から人家が建てられていったのであろう。

現在でも麻名用水以北の古い屋敷は地盤が高いが、南は比較的低いから、これを見ても土地の高

低の差があることがはっきりわかるし、北の方の人家が後からできたことが想像される。

この吉野川流域の肥えた砂洲の上に、適作である藍が藩政時代に作られるようになることも、北部方面に次第に人家が建っていったように思われる。吉野川それ自体も北に動いて、現在の江川が本流から支流へと変っていったようである。知恵島が阿波郡であり、江川が阿波、麻植の両郡の間を大きく流れて、その境界をなしていた巖然たる事實は、江川が吉野川の本流であったことを証明している。百五十年位前までは、現在の遊園地の西端辺りが物資の荷上場で、藍玉を積出したり、肥料、雑貨等を荷上げていたといわれている。北麻植市の工藤豊利さん宅の東の方を通称船場と



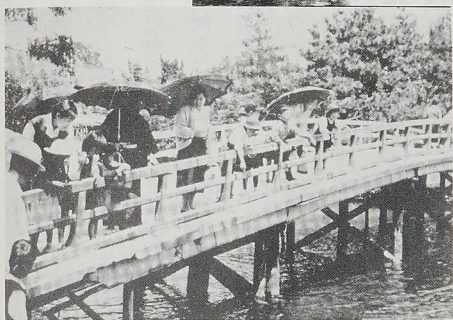
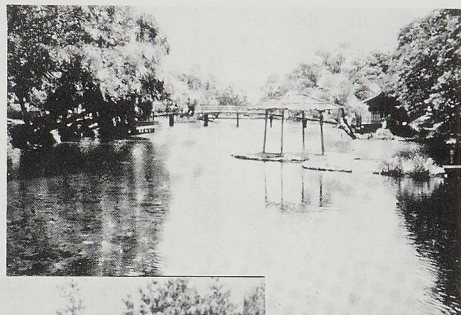
遊園地から見た江川の流れ

今もいわれているが、あの辺りに倉庫があつて、荷物を集積していたのであろう。

江川の堤防は明治六年に徳島刑務所の囚人の汗によつて完成されたといわれるが、吉野川の堤防が大正中期に完成されたので、その必要性がなくなり、江川の堤防は次第に破壊されて、今は大部分取り払われたが、遊園地の中の桜並木の下にだけ、その面影が残っている。また牛島の北方にも少々そのままの姿が残っており、小学校の児童を連れて先生が見学に行っていたのを知っている。

江川遊園地

工藤館蚕種合名会社の社長工藤鷹助氏は副社長である正太郎氏、宗正氏等と相謀り、大衆のリクレーションの場とし、また徳島鉄道局の徳島本線に西麻植駅を誘致したにもかかわらず、乗降客が少ないために廃止駅になるのを防止するためにも遊園地開設を計画した。廃川敷となつている江川の現在地に昭和三年一月工を起し、毎日毎日十数人の人達を雇傭して三年十一月の長い歳月を費やし、その間雑木、荆棘や竹林等を切り払い、或いは平地を掘り下げて入江としたり、その土で山を築き、また松の成木、桜、楓やさつき、つつじ等を植えつけて一大庭園化して、春は桜、つ



ありし日の江川遊園地

じ、さつき、牡丹の名所として、
また夏はほたると異常水温の夜霧
による納涼の場とした。秋
は紅葉が美しく、川には鯉を放流
して常時ボートを置き、また猿舎
も設けて、十数頭の猿を飼って子
ども達のアイドルの場としたので
あり、建設費は全部自費でまかな
ったのである。附近の人々のいこ
いの場として、また県民の一大レク
レーションの場として無料開放さ
れたことは個人として考えられな
い位の社会奉仕事業であり、県民
でここに来訪しない人は恐らくな

かったと思われる。

なお工藤鷹助氏は昭和十二年当時の県知事清水良策氏より、この江川遊園地開設の功績に対し表
彰され、また昭和十五年には朝香宮鳩彦王殿下が、昭和十六年は高松宮殿下がご遊覧になっている。

江川小唄は、手拭に二番まで印刷されている。それを左に掲げてみよう。

江川小唄

一、誰に逢うやら 気もいそいそと

渡る朱ぬりの 太鼓ばし

二、風に吹かれりや 柳でさえも

水に恥ずかし 影うつす

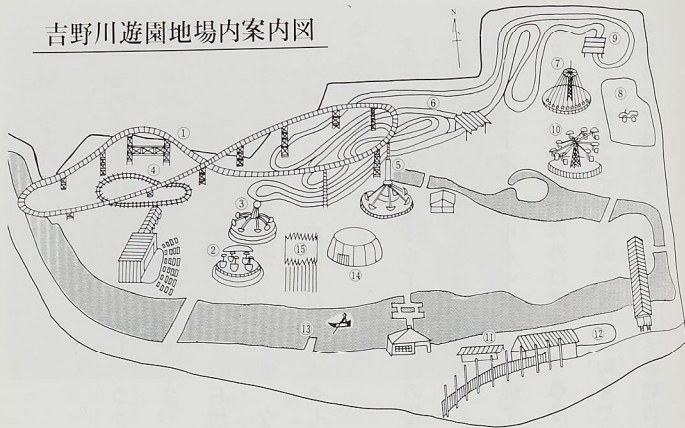
短い句であるが、独特のほのぼのとした、なごやかな詩情あふれる句ではないだろうか。

なお園内には保勝碑がある。

江川遊園地の碑

吉野川改修に当り、江川一帯廢地となる、西麻植村の素封工藤鷹助翁はその形勝と水温の特異と
を惜み、弟正太郎子宗正と謀り、開いて遊園となし、之を開放して衆人の慰安保健に資せんと慾し、
昭和三年一月役を起し、六年十一月成り、亭館器具の完備等皆翁一家の投資に係る、爾来約二十年
間衆人行楽の名勝たり、偶々時勢一変し、世事旧慣を改む、因て之を機とし、昭和二十三年十一月

吉野川遊園地場内案内図



- | | |
|-------------|-------------|
| ① ジェットコースター | ⑧ こども自動車ひろば |
| ② メリークラウン | ⑨ シングルゴーカート |
| ③ トラバوند | ⑩ パラトルーパー |
| ④ こども汽車 | ⑪ ゲームコーナー |
| ⑤ アストロジェット | ⑫ 子供自動車 |
| ⑥ ダブルゴーカート | ⑬ ボートのり |
| ⑦ チェーンタワー | ⑭ ⑮ 催し |



桜でにぎわう吉野川遊園地

吉野川遊園地

昭和四十四年春、徳島新聞社が四国博覧会を開催した。徳島公園一帯を第一会場とし、この吉野川遊園地を第二会場として、いろいろな遊具を備えて開場したが、盛況であったので、同年四月六日、徳島興発株式会社^{こくはつ}がそのまま継続して工藤禎蔵氏^{ていぞう}より借用、吉野川遊園地と名称も改め、現在に至っているのである。子供達のメッカとして、いろいろな遊具が備えられ、今回新しく子供汽車とパラトルーパーが増設された。その配置図は左の通りである。

昭和二十三年十二月 岡本由撰併書

を以って財団法人となし、その経営に移せり、茲に由来を記して後に伝ふ。

麻名用水

麻名用水は、現在は側壁と底面がコンクリートで固められているので、水泳の心得のない者が、夏期の水位の高くなった時期に足をすべらせば、この世にグッドバイせねばならぬ。昭和四十年頃までは、追分の北の柳橋から上手は石垣作りで、下手は土堤であった。
上手の石垣は魚の棲家で、蟹、蝦、なまず、うなぎ、ぎぎ等が一つ一つの石垣の中に一匹ずつ巣を作り頭を出して、夜などは、火をさし向けると特に蝦等は飛び出てきて、独りでに網の中に飛び込んできたものである。

冬期は水が浅くなるので、子供達の格好の遊び場となり、ふなすくいの好時期で、杭や藻のかけ等にひそんでいるのが面白くほどこえた。また、大きな手長えびも面白くほどこれた。

柳橋から下流は、ゆるい傾斜の土堤で、水面から土堤まで二間から四間位の幅があり、所々に竹藪があつたが、それ以外は草地で、春はタンポポ、レンゲ、スミレ等の花が一面に咲いて、子供達の楽しい遊び場であつた。藪は、初夏になるとホタルの棲家で、何千匹となく飛び交い、ホタルの名所として有名で、徳島辺りから毎晩のように汽車やバスで、多くの人たちがホタル籠をもってと

りに来た。とつてもとつてもホタルの数は減つたとは思えない位であつた。

夏は子供達の水泳天国で、無論水も現在のようによごれておらず、どこからでも飛び込めだし、どこからでもはい上がったので、毎日学校から帰ると、橋のそばの洗場を中心に、芋をこぐように

たくさん子供達が群れていた。特に夏休みは朝から晩まで泳いでいた。小さくて泳げない子でも、洗場でバチャバチャしているうちに、じきに泳げるようになったもので、一年生でも泳げない者がなくらいであつた。

流路も直線にするために、昭和十年頃に柳橋から下流百五十米くらいを、南に掘り変えたが、現在は、旧河道上に町営住宅が建つて、昔の面影は全然ない。

この麻名用水は、明治末期の藍作農業経営の衰退を背景とした、稲作への転換による農業基盤の再編成を目ざした土地改良の大事業で、麻植郡の東部より西



麻名用水

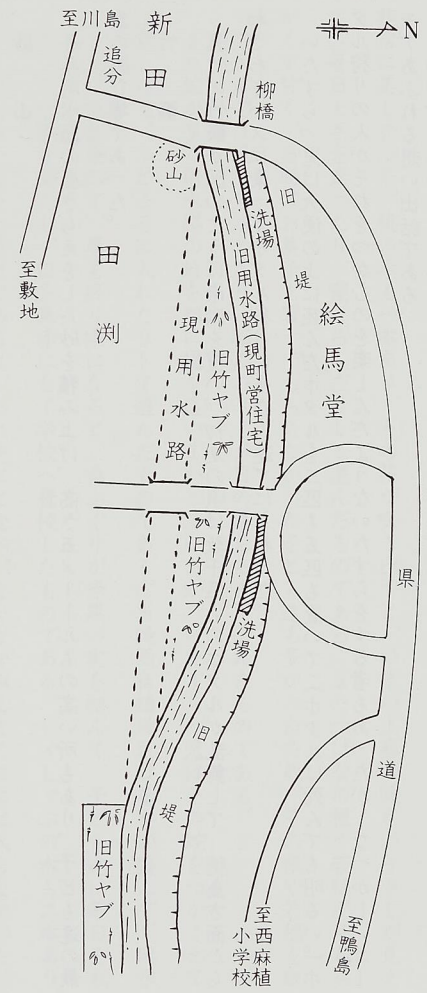
郡の大部分の地域にわたって水田の灌漑をするものであるが、沿岸住民は電気洗濯機のなかつた時代、毎日洗濯に利用していたものである。

そして、この灌漑面積は一千二百町歩余に及ぶ。当時は県下で最大の用水路であり、明治三十七年の早魃が契機となり、同三十八年一月、森山村、牛島村、高原村、浦庄村、石井町の当時の五か町村が組合を設立して計画し、同三十八年の九月から三十九年二月まで測量に費し、同年十二月一日より着工、同四十一年五月一日通水を開始し、同四十五年三月に支線の工事も完了して、ここに全線の通水をみたのであるが、その総工費は四十四万六千四十一円四十五銭五厘であったという。なお、大正三年の調査によると、灌漑区域は一二五四町八反歩で、通水当時より五十四町歩増となっている。

また、この工事費は、日本勧業銀行より二十年賦で借り受けたが、その借金は、昭和四年までに完済したそうである。なお、共同事業をする場合には必ず反対があるが、当事業でもそれが激しく、西麻植地区でも貴重な耕地を買収されるので、蓮旗を立てたりして反対をしたそうである。また、灌漑利用地区においても、当時の地価が反百二、三十円に対して、用水の負担費は八十余円で、この額は、地価に対してあまりにも高額であったからだといわれている。しかし、用水が完成して通

水が始まると、反最高八百円と高騰して、皆目をむいて驚いたという。

麻名用水流路の変遷



田淵西端と、絵馬堂西端の所の麻名用水は、昭和十年頃までは図のように曲流していたのである

が、水路の流れをよくするために、現用水路に真直に改修したのである。当時は、

一、砂 山

毎年用水路の底さらえをした砂を積み上げ、高さ五メートルもの高い所もあり、子ども達の最高の遊び場であった。

二、竹 藪

真竹の竹藪が図のように南側を覆い、初夏の頃は数千匹ものホタルが乱舞して、徳島方面からわざわざバスに乗ってホタル狩りに来た人達でにぎわった。

いたずらつ児は大便の上に死んだホタルを三匹も五匹も置いて（ホタルは死んでも明るい）ホタル狩りの人がそれをつかむのを楽しんだようないたずらをする者もあったが、なつかしいユーモアあふれる想い出話である。

三、用水路

夏はカツパ天国で、子ども達が洗い場に何十人も集まり、水泳を楽しんでいたというよりは、泳ぎまくっていたという方が適当なくらいであった。稲がすむと水門を閉めるので、水位が下り、ちょうど子ども達の膝くらいまでしかなかったため、みんな玉網で、なまず、ふな、えび、かに

等を競ってすくい遊んだものだ。当時は吉野川の水量も多く、地下水位が高く、現在のようにコンクリートで囲ってなかったため、用水路も底や横から吹き出していて、その水も透きとおるように澄んでいた。

四、堤斜面

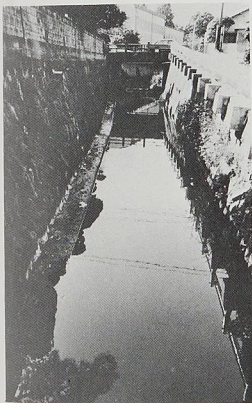
北岸の堤は斜面で二、三間もあり、春はたんぼほ、れんげが咲きほこり、柳の木が若葉になり、非常に美しかった。桃の木も一本あり、その花が咲き出すと、いよいよ春の暖かいきざしが見えて、毎日土手を走ったり、寝ころんだりして遊んだものである。またつばなの根や若穂がやわらかくて甘く、当時はお菓子も買ってもらえなかった子ども達も多かったため、その根や若穂を取ってかんで堤防を滑ったり、転んだり、夕日の落ちるまで遊んだものである。

また蛇が多く用水路の蛙を餌に堤を這いまわっていたが、いたずらつ児はその蛇をつかまえては殺したり、ふところに入れてたりして遊んだものである。当時西麻植地区は養蚕が盛んで、用水より北は全部桑畑で、春も終り頃になると、桑ふぐりが赤黒い実を結んで、子ども達は毎日それをもいでは腹を満たし、口を真赤にして学校へ登校したものである。しゃしゃぶの木も二本あり、甘ずっぱい赤い実をつけはじめると、われ先にと食べ、なかなかみんなの口には入らなかった。

湯吸谷川の流路の変遷

川島町山田の奥に源を發して、水神の滝等の奇景を作つて、西麻植の西新田に流下してきている湯吸谷川は、現在も堤防が残っているように丸善石油裏を通つて、現在埋まっているが、南家具店の下を通り、斜に現在の麻名用水を横切り、湯浅石油店の南側の倉庫の下（現在は高くなつてゐるが、これは麻名用水を作つた時の掘り上げた土の置場である）を通り、その東側の凹地を東北に抜けて江川に流れこんでいた。大正の頃は国道一九二号線辺りはグロ地で、犬や猫の死骸を捨てたり、塵の捨て場であつたが、戦争で増産のために次第に開墾され、現在のように田や畑地になつてゐるのである。

なお吉野川の氾濫のため、たびたび流路が變つたので、この川も湯浅石油の裏辺りから、現在の麻名用水の低地を東流し、飯尾川に通じていた時代もあつたのである。



湯吸谷川

第六節 教育

西麻植の学習塾

西麻植には学習塾が八幡神社の宮司さん宅などにあつたことは鴨島町誌に

松本重延（神官）

文政五年、明治元年その最盛期は慶応二年の頃で当年の寺子は男二、三

十人、女八人であつた。

郡常之進（農民）

天保、弘化の頃

郡 与市（常之進の子）嘉永四年、明治元年、最盛期は明治元年で当時男六十人、女二十人の計八十人の子弟が通つた。

河野与平（農民）

嘉永六年、明治五年その最盛期には男八十五人、女二十五人計百十人に及んだ。（明治元年の頃）

とある。以上の他、西麻植小学校の記録によれば、鴻野文右衛門（寛政の頃）、姓不詳本五郎（享

和の頃)、渡辺右源太、長谷川長蔵、岡田治郎左衛門(文政の頃)、村橋達三(漢法医、文政の頃)、松本加賀(天保、弘化の頃)等いずれも寺子屋の師匠であつたと記されているが、この他にも松本重延さんの子息の真栄さんが明治十七年頃から明治二十五年頃まで塾を開き、川島町からも塾生が通つて来ていたといわれている。

この他に裁縫塾としては、明治時代やそれ以前にもあつたと思われるが記録にはない。

大正五年に中西家が善入寺島から全島民の立ち退きにより、田淵に移転して来て、戸主利之吉氏の子女であつたアサノさん(西麻植小学校の先生を大正八年から大正十二年までされた)が西麻植小学校の先生に来るまでと、先生をやめてから昭和十年頃まで塾を開いておられ、生徒もいつも二十人位は来ていたようである。



大正初期の裁縫塾

西麻植の学校

明治四年に文部省が設置され、翌五年八月に太政官布告で学制が公布されたが、我が西麻植地区では学制発布の翌々年の明治七年に創設された。

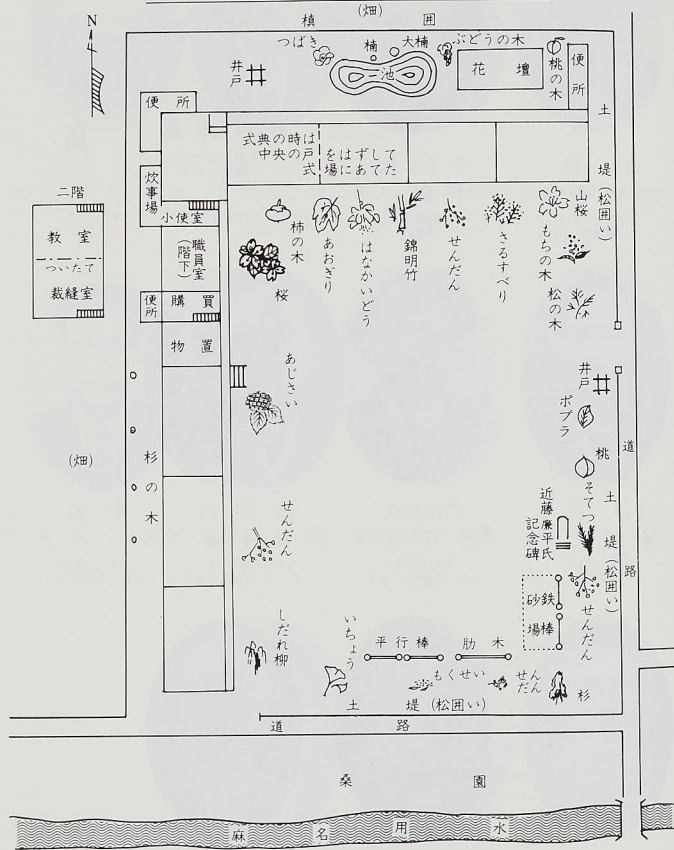
しかし校舎は河野與平氏宅を借用して、先生には八幡神社の神官松本真栄氏と河野與平氏の両氏があたり、教育を始めた。校舎ができた明治十三年八月までは、さらに二、三か所変つた場所を借りて教育をしたようである。

当時の修業年限は下等と上等各四年間であつたが、明治十四年には初等四年、中等二年、高等二年と改められたが、義務教育でなかつたので就学率も非常に悪かつたようである。

明治十八年二月に内閣制度が創設され、国家主義の立場から教育制度が改革され、また十九年に「学校令」が発布され、尋常高等の課程に分けられ、尋常科四年が義務教育になった。高等科は一郡一校制がとられ、川島町に設けられた。明治二十三年十月「教育に関する勅語」が発せられ、教育目的が示された。

明治三十年四月に「西麻植尋常高等小学校」と名称が変わつたが、それまでに名称の変更や統廃

大正の終り頃の校地、校舎の見取図



合が行われたようである。現在の地に校舎が建って、新しく移転してきたのは明治三十五年である。明治四十一年四月より「小学校令」の改正によって、これまでの四年の義務教育年限が六か年に延長実施されている。

激動の時代となった昭和時代は話題が最も多く、まず初期に麻植郡教育会主催の小学校体育大会に連続優勝したことであろう。昭和六年満州事変が起こって国の方針が軍国主義一色となったのに伴い、小学校にも軍事訓練が加わるなど、子供たちも戦争に明け暮れる毎日であった。戦争末期や終戦後はしだいに食糧が窮乏し、腹をへらして通学した子供も多かつたし、また農家の子供たちは毎日農作業の手伝いを強いられた。

昭和二十一年十一月に新しい民主憲法が制定され、続いて「教育基本法」、「学校教育法」が制定公布され、新しい制度と方針に沿って教育がなされ、この間に中学校教育が行われたこともある。昭和四十一年には卒業生である高志幸好氏の寄附により、プールが造成され、また校舎も新しく建てかえられている。昭和五十年には創立百周年式典が盛大に挙行され、今百年を迎えようとしている。

歴代校長

初代
岡久太郎
(明27. 4~
明28. 5)

3代
戸井源蔵
(明30. 4~
明35. 6)



4代
平岡賢太郎
(明35. 7~
明39. 10)



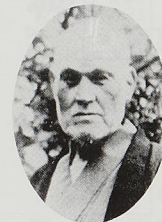
2代
竹重一平
(明28. 5~
明30. 3)



7代
鴻野文平
(大5. 4~
昭2. 3)



6代
河野昇平
(明45. 4~
大5. 3)



5代
金子尚二
(明39. 11~
明45. 3)



10代
山口覚
(昭10. 4~
昭14. 3)



9代
波部新七
(昭8. 4~
昭10. 3)



8代
亀井成一
(昭2. 4~
昭8. 3)



14代
三橋脩吉
(昭22. 4~
昭24. 7)



13代
河村文平
(昭21. 4~
昭22. 3)



12代
大村辨一
(昭17. 4~
昭21. 3)



11代
横田好雄
(明14. 4~
昭17. 3)



18代
大木徳
(昭43. 4~
昭47. 3)



17代
富永勝
(昭39. 4~
昭43. 3)



16代
武田薫
(昭32. 4~
昭39. 3)



15代
山口敬
(昭24. 7~
昭32. 3)



21代
河野真
(昭54. 4~
現在に至る)



20代
市原博幸
(昭52. 4~
昭54. 3)



19代
入交泰助
(昭47. 4~
昭52. 3)

剣道の道場昭武館

仁井利雄さんのお父さんの孝雄さんは、多芸の人でテニス、華道は勿論馬術等にも秀でていたが、特に剣道は四段で、川島警察署の教官等もしていたが、自宅の古い倉を壊して、本宅の東南方に剣道の道場を作り昭武館と名づけて青少年や一般の人達にも教えていた。その建設は大正十四年頃で昭和六年に若くしておしくも死亡されるまで六、七年の間教えられたのである。

県からも武道の功労者として表彰を受けているが、麻植中学校創設当時剣道の教官として召請を受けたが、自分は財産もあり、生活が安定していた関係上、当時職が無かった剣友の石井在任の石井隆介さんを推薦して教官にした話を当時の人々は美談として知っているが、ほんとうに心のなごむ友情あふれる物語ではありませんか。



仁井 四段

横田 二段

西麻植青年会館建設の話

西麻植青年団は、明治四十四年十月創立し、人格の陶冶、身体の鍛練を行ったり、社会活動等をしてきたが、大正九年三月西尾村青年団の組織と共に西尾村青年団西麻植支部と改称して、終戦当時まで活動を続けていた。終戦とともに、その活動は消極的になったが、現在もここを拠点として数少ない団員ながら活動を続けている。

西麻植広畑の人で西麻植小学校の教頭をしていた麻植茂氏が西麻植支部長として青年たちの指導に当たっていた昭和四年、中筋の素封家工藤半平氏が青年たちとの間に会館建設の熱望があることを聞き、自ら進んで村出身の成功者である東京在住の和田嘉衡氏に依頼し、種々折衝を重ね、遂に和田氏の独力で会館の建物全部を寄附するように話をまとめたのである。

また工藤鷹助氏は工藤館蚕種合名会社を経営し、村のあらゆる事業等に協力援助をしていたが、本事業には敷地を提供して援助



青年会館

の手を差しのべた。青年たち四十五名は三人の好意に感激しつつ、一月十五日より二週間毎日毎日工藤鷹助氏の好意の炊出しを受け、連日罪罪として降りしきる雪の中をものともせず、十二台の荷車を引き、吉野川の川原よりバラスの運搬に従事し、自らの血と汗によって建設に協力したのである。三月二十日に青年総出で建前を終わり六月中旬竣工、七月十五日盛大に落成式を挙行した。建物は当時の牛島村麻植塚の日野組日野浜太郎氏の請負になり、その総経費式千三百円で、むろん和田嘉衛氏が全額寄附をされたのである。和田嘉衛氏の墓は東禅寺墓地の頂上にコンクリートの垣を回らした円墳作りで築かれている。心ある方は草むしりなりお参りなりしていただきたいと願うものである。

なお当時の落成記念の青年団幹部は左の通りであるが、数名が現在生存しておられるのみで今昔の感が深い。しかし、毎日大八車を引いてバラスを運んだ団員たちはまだ元気に活躍している。

- | | | | | |
|-------|-----------|-----------|-------|-------|
| 団 | 長 | 麻植 茂(故人) | 評 議 員 | 中村 種男 |
| 副 団 長 | 中西喜代次 | 仁木島重明 | 評 議 員 | 岡田 博文 |
| 〃 | 幸田 正明(故人) | 多田 寛一(故人) | 〃 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 評 議 員 | 岡田 博文 | 明石 勇 | 〃 | 〃 |

- | | | | |
|--------|-----------|--------|-----------|
| 評 議 員 | 河野 理 | 江川 班長 | 佐藤 利意(故人) |
| 〃 | 平島 敏一 | 新田 班長 | 阿部 忠男 |
| 修養部長 | 大塚 栄(故人) | 社会部副部長 | 清水虎太郎 |
| 社会部長 | 麻植 義明(故人) | 修養部副部長 | 多田 清 |
| 体育部長 | 大久保正義(故人) | 体育部副部長 | 仁木島忠平(故人) |
| 麻植市班長 | 多田富太郎 | 顧問 | 亀井 成一(故人) |
| 田 淵 班長 | 河野 輝男(故人) | 〃 | 鴻野 文平(故人) |
| 中筋班長 | 工藤 芳雄(故人) | 〃 | 植村 昇(故人) |

第七節 生活と文化

新聞の話

報道機関のなかった明治当初、また明治六年一月の徴兵令きょうへいれい太政官告諭文中の血税けつぜいを人民の生血せいけつを絞しぼり取るものと解して、一揆いぎが起こったような無知の人々、そんな社会人に知識の啓発けいはつをし、ニュースを提供するのはまず新聞であつたが、果して西麻植せいまうの誰が新聞を読んだであろうか。

役場でも、学校でも、予算書にも載っていないから、果してそんな公的機関でも取っていたかどうかかわからない。

明治になるとともに、文明開化の波が急激に押しよせてきたが当時の開化都々逸ととぎの文句の一つに
文明開化を知らない者に

新聞せんじて飲ませたい

とあるように新聞は文明開化のシンボルであつた。

本県初の新聞は明治六年二月創刊の「名東県新聞」で月一回の発行であつたそうであるが、一月遅れで六年三月に徳島新聞が創刊され第一、第二号が二月中に、第三号が四月に、第四号になると翌年五月の刊行とスローペースで両新聞共漸くして発刊されたという。

三番手として登場するのが明治九年四月創刊の「普通新聞」であるが、果して我々の父祖がこれを購読していたかどうか。

独走どくそうを続けた「普通新聞」に対して明治二十一年八月阿陽新聞あやのうらが発刊されたが、これもしばらくして廃刊はいかんとなり、二十一年十一月には「徳島新聞」が隔日刊かふじつかんで出たというから当時はまだ日刊ではなかつたのであろう。

かくして、ラジオ放送が大正中期に始まるまで新聞はニュースの唯一の機関であつた。

ただ明治初期に工藤家二軒が新聞を読んでいたという話が伝わっているが確かな話ではない。

郵便と電信電話

大化改新おほなへあらたまるの詔みことまことに、駅馬えきま、伝馬でんまを置くことがみえ、大宝律令たいほうりつりょうで確立、諸道三十里しよどうさんじり（現在の四里）ご

とに一駅を置き、駅に駅馬を備えたといわれる。十世紀以後この制度は衰え、鎌倉時代には代わって交通の要地に私人の経営する宿が発展し、幕府はこれを利用して荘園と宿から馬と食糧を徴発する制度をつくった。これも南北朝時代に衰え、江戸時代には五街道を定め、街道に宿場を設けて馬と人夫を備えたといわれている。西麻植では東禅寺山の忌部遺跡といわれる古墳から、明治十四年に駅鈴が出土しているから、この辺りに駅が設置されていたのであろう。またその当時の道路はどこを通っていたのであろうか、これはおそらく山沿いの道と思われる。はつきりと考えられる道は現在の飯尾街道の旧道から八幡神社の大鳥居の所へ斜めに入り北へ出て十力寺跡へ廻り込み、さらに北へ出て、飯尾街道を西へ三メートル位行ってまた山手へ入り、地藏さんの前を西へ、笠松神社のすぐ北側の山裾を西へ抜け、江沢さんの西側へ出て、県道を西へ行って上りたての立石さんの前へ出たといわれるが、おそらくその通りであろう。

藩政時代は宿場を設けたが、幕府の用を果たす継飛脚、大名が江戸との通信連絡のため設けたのが大名飛脚で、民間の通信に携わったのが町飛脚である。

また人が死亡した時等には近所の人があるの死亡した家の親類等へ知らせに行つたもので、たいてい二人一組となつてテクテクと歩いたり、自転車が普及してからは自転車で伝えるに行つたものであ

る。

明治四年に郵便制度が定められ、明治五年七月一日に川島郵便役所が開設し、西麻植村はこの川島郵便役所の集配区域となつた。

なおこの川島郵便役所(後に郵便局と改められる)の所(局)長の氏名は初代山口治平氏、二代松崎定蔵氏、三代谷村好三郎氏、四代谷村清一氏、五代谷村靖氏で、開設当時の集配人は徒歩で皮の郵便靴を肩にかけて歩いて廻っていたのである。大正時代は、川島町桑村の大岡次郎吉という実直な老人が毎日毎日テクテクと歩いて、夏の暑い日等は手拭を制帽の下にたらし配達に廻っていたことを覚えてる。この人は昭和十年頃まで勤務していたが、退職年月は不明である。それから後は若い人が自転車で配達するようになった。

昭和二十九年三月三十一日鴨島町と合併したのに伴い、昭和三十年十一月一日より集配の統合が行われ、西麻植地区は鴨島局の集配区域に変更された。

川島郵便局の集配区域であつた西麻植地区は、明治二十七年三月から電報取扱業務が開始された



川島郵便局
(昭和43年2月までの局)

のに伴いその世話になっていたが、昭和三十二年十一月三十日鴨島電報電話局の開設によって、こちらでお世話になることになった。当時電報といえば、キトクか死亡通知であったので電報となれば、みな忌みきらったものである。電話は、川島郵便局管轄で大正十一年に一回線架設されたが、昭和三十二年の鴨島電報電話局の開設に伴い、業務が移管された。

なお電話開設当時の番号は川島郵便局長であった谷村靖氏の奥様の話によれば

一番 工藤 源助

二番 工藤 鷹助

三番 工藤 忠介

八番 工藤正太郎

でこの人たちと共に電話を引いたのは中西利之吉、立石市平、鴻野延太郎、工藤館蚕種合名会社、中原守一の諸氏であったようである。

また昭和三十三年三月より有線電話が開設され、数多くの人たちが加入し現在に至っている。

鉄道開通と西麻植駅

鴨島出身の代議士川真田徳三郎氏と同じく代議士板東勘五郎氏等の唱導に応じ、板野郡一条村（現吉野町西条）大串竜太郎氏等二十九名が徳島鉄道株式会社を作り、その会社によって徳島―川田間の鉄道敷設の願書を明治二十八年十一月二十二日徳島県知事に上申し、明治三十年六月四日日本許可が下り、沿線住民の永年の願いであった鉄道が敷設されることになったのであり、同年十一月二十七日起工式が挙げられたのである。

○徳島	18.9K	○鴨島	3.8K	○川島	6.3K	○山崎(現山瀬)	5.1K	○船戸(現川田附近)	40K	○池田
明治32・2・16開通	明治32・108・1519開通 西麻植駅開通	明治32・12・23開通	明治33・8・7開通	大正3・3・25開通						
まず徳島―鴨島間が第一期線として	明治三十二年二月十六日を以って開通した。古老の話によれば鴨島駅へ美馬郡や麻植阿波の山間部方面から弁当持ちでわざわざぞうりて毎日テクテクと歩いて見物にやって来たそうで、来たついでに									

んびりと半日も坐りこんで見る人もあったそうである。ついで第二期工事として川島駅まで完成したのが同年八月十九日であった。西麻植の旧家工藤源助、工藤虎吉両氏は西麻植駅設置の必要性を痛感し、直ちに会社へ陳情して用地は会社を買収し、盛土工事および駅舎の建築は地元が負担する条件で、設置許可の約束を取りつけ、費用の大部分は両氏負担により、同年十月十五日西麻植駅に初めて汽車が停つたのである。当時西麻植駅の乗降客は一日平均八十四人程度であったという。

なお同年十二月二十三日、山崎（現山瀬）間が開業し、翌三十三年八月七日山崎—舟戸（現川田附近）間が開業したのであるが、明治三十九年三月三十一日鉄道国有法が公布され、次々と私鉄が買収される中で、徳島鉄道も明治四十年九月一日国に買収されて鉄道院の経営となったのである。私鉄時代のエピソードとして、鉄道会社の重役であった工藤家は事前に駅員に汽車に乗ることを連絡しておいて、発車時間を待たせ、汽車が着いてからゆつくりと出かけていったという話が伝わっている。

なお川田—池田間は大正三年三月二十五日鉄道院によって開通したのであるが、それより先大正二年四月二十日阿波国共同汽船株式会社の手によって、徳島—小松島間開業、大正五年七月一日阿波軌道株式会社によって、古川—撫養間が開業された。

昭和十年高德本線が開業するまでは、徳島の新町橋のたもとから五屯程度の四十人乗り位の座席のついたボンボン船（正式には巡航船といわれた）が、古川駅まで毎日通っていたのである。我々西麻植小学校の生徒は修学旅行に毎年鳴門へ行ったのであるが、必ずそのボンボン蒸気船に乗って古川駅の手前まで行ったのであり、これは当時ののどかな想い出である。

さて西麻植駅ができたものの、乗降者が少なく採算割れて、鉄道省としても駅の廃止の意図が次第に強くなり、大正末期には遂にそれが頂点に達した。

当時盛業であった工藤館蚕種合名会社の社長であった工藤鷹助氏はこれを憂慮し、当局に私費を以て陳情を重ねると共に、現市場町方面の貨物を西麻植駅で取り扱うように計画した。粟島の渡し場に西尾村営の仮橋を架橋して、通行を便にし、また駅拡張のために用地五反歩を西尾村において買上げ、鉄道側に寄附する等のお膳立をして遂に貨物取り扱い駅としても認められた。貨物の取り扱いによる増収と、市場町方面の人たちの西麻植駅利用による増収が得られたのであり、またその上に駅利用者の増加を図るための工藤鷹助氏個人開発による江川遊園地の開園、西麻植療養所の開設等もあり、駅利用者も次第に増加して廃止の危惧も無くなったのである。が、如何んせん時代の波には勝てず、貨物取り扱い駅も他駅と共に廃止になり、乗降客もマイカー族の増加により現



西 麻 植 駅

在は無入駅として、わずかにその命脈いのちを保っているに過ぎない。わびしさのただようローカル駅のたたずまいも、また風情ありといえは負けおしみの言葉であろうか。

なお川島駅まで開通の時（西麻植駅は開通後にできているからおそらく鴨島——川島間と思われる）、開通記念に当日に限って無料乗車をさしたところ、珍らしさのあまり附近は勿論もちろん近在の山からもわらじがけて乗りに来たとの話が残っている。なお当時の人々が毎日口ずさんだ徳島鉄道唱歌を紹介しよう。

徳島鉄道唱歌

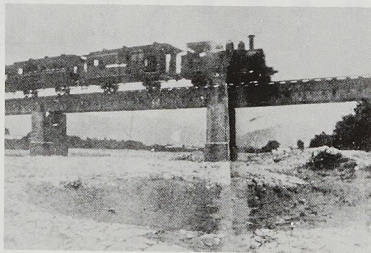
一、黒煙空にたなびけば
汽笛の声も勇ましく
寺島駅を後にして
渭の津の城も遠く去る

大和田健樹 作
寺島駅より船戸駅まで

三、左に見ゆるは大滝山

桜の名所で焼餅は
日の出の餅屋で有名ぞ
宙をとぶまに我が汽車は

二、明るい浮世に生まれ来て
暗い世渡る囚人を
救い導く監獄所
右に見て行く汽車の旅



開通当時の列車

- 四、はや府中駅につきにけり
国府観音井戸寺の札所
春の遍路は後たたず
石井石井と駅は呼ぶ
五、赤帽きいた駅長さん
藤の名所は地福寺で
庭で名高い童学寺
法をひろめた空海が
六、幼き頃の学問所
歩けば遠い牛の島
汽車の旅なら何分間
はやくも着いた鴨島駅
七、西麻植駅も程近く
絹と藍との名産地
- 八、長い堀割くぐりぬけ
佐渡製糸の煙突が
太くて長い四国一
文化の町は川島駅
篠原紫雲の植桜
歴史の上に咲く花は
九、後の世までもかんばしい
北に見ゆる岩の鼻
林道感の居城にて
月の名所で知られたり
十、学の駅では嘉助餅
やわらの指南道場ば
二つの森を後にして
山崎駅も程近し

- 十一、おざらし池や忌部さん
日鷲の命の古蹟あり
清き流れにかけられた
その名もゆかしほたる橋
- 十二、湯立の駅では高越山
凍豆腐や紙すき場
凍豆腐や紙すき場
凍豆腐や紙すき場
凍豆腐や紙すき場
- 十三、次は最終船戸駅
紙より白い娘子が
さいさい来やれと招かれる
岩津の淵も水清し
あまたの名所旧蹟を
深め歩かん汽車の旅
- 続いて完成した池田駅までの唄をついでに記してみよう。なおこの唄は船戸駅を川田駅と改名し
てからできた唄である。

川田 — 池田

脇町中学校 教諭 北川 博愛 関
穴吹尋常高等小学校 訓導 先川 協 作

- 一、光あまねき君が代や
慈雨にうるはう若みどり
櫻狩る子の袖の上に
舞える胡蝶の影のどか
- 二、大正三とせの春弥生
阿北にかける大滝の
黒煙の息呼ぶこえに
進み行く世の幸なれや